

14.5-563



1200600798502

新疆經濟要覽

翻譯文
ソ聯極東及外蒙調查資料

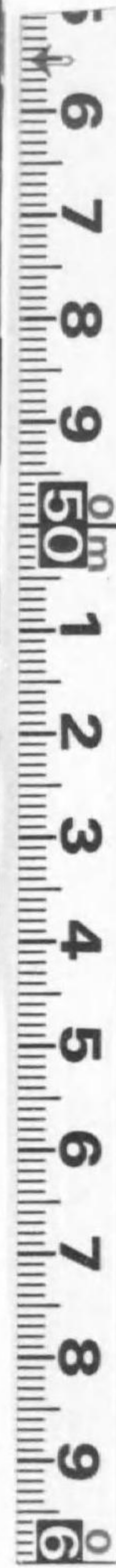
第四十二編

山下義雄(譯)



滿鐵產業部

12.12.18



始



最A
201

露文
譯文
ノ聯極東及外蒙調查資料
第四十二編

新疆經濟要覽

滿鐵產業部



I種
W



譯文
ソ聯極東及外蒙調査資料發刊の辭

ソ聯極東地方及外蒙の地は日滿兩國の隣接地として、之れが真相を究明するの必要なのは言を俟たない。嘗て當會の前身たる調査課が十餘年の日子を費し、露西亞諸官廳の各方面に對する調査研究の結果たる權威ある文獻を網羅し、之を翻譯して露亞經濟調査叢書全九十卷、約三萬頁の浩翰なる資料を江湖に發表した所以も茲にある。

同叢書は其後益々我國の關心を要するに至つたソ聯極東、西比利亞、滿蒙に關して精密な知識を與ふる唯一の資料として、現に尙ほ我國各方面に多大の便宜を提供しつゝあるは周知の事實である。而も世界各地の狀勢は日に月に變化して底止する所を知らず、前著露亞經濟調査叢書の提供する知識が如何に詳細且豊富なるものにせよ、發刊以來十餘年其自然地理的部分を除き現狀と多大の懸隔を見るに至つたこと亦た已むを得ないところである。抑々露亞經濟調査叢書の原本となつた資料は主として露西亞革命前、即ち帝政露西亞時代に刊行せられたものであつたから、其純然たる自然地理的部分に於てこそ今日に於ても變化する所はないが、其文化的方面、政治經濟に關する分野に於ては根本的な改革變遷を見、最早舊日の佛を留めない状態に在る。又自然資源の方面に於てすら近年ソ聯政府の積極的な探査事業の成果として幾多の新發見があり、從來未調査の爲めに無きものと推定せられたものにして今日全然認識を改むるを要するに至つたもの一にして足らぬ。

何れの意味に於てもソ聯極東、西比利亞、蒙古は新たに見直さねばならぬこととなつた。此必要に應ずるため當

會は曩に「ソ聯極東及び西比利亞總攬」發刊の計畫を立て自然、社會各方面に亙る資料を周到に網羅し且検討を加へて之が整備に努めつゝあるのであるが、時局は益々此地方の實情を一日も速かに一般に知らしめることを要求してやまぬので飽迄巧選主義に膠着するを容れない。乃ち時勢の要求に順應し、ソ聯極東、蒙古、新疆各方面に亙る最新の資料の略揃つたことを機會とし之を翻譯し單純な素材の健急速之を刊行することゝした。本資料が江湖の急需に應じ國家國民の進運に貢献せむことを庶幾ふ。

昭和九年八月

滿鐵經濟調査會委員長

河 本 大 作

例 言

- 一、本編は一九三六年莫斯科國立社會經濟出版所から發行された全聯邦商業會議所編纂にかゝる「東方諸國經濟資料」
“Страны Востока, экономический справочник” の第二卷「中東」(イラン・アフガニスタン、新疆の三編から成る)中の最後の一編「新疆」を全譯したものである。
- 一、本編は新疆の經濟文献としては發行年次に於て最新のものに屬すると共に通編所謂簡にして要を得新疆の經濟現勢を知る上の好資料と信ずる。
- 一、因に支那は民國三年全支(蒙古を除外)に道縣制を實施したが、民國十七年(昭和三年、一九二八年)道を廢するに當つて單り新疆のみは之を區縣制とし、従前の八道のかわりに新にアルタイ、タルバガタイ、イリー、アクス、ウルムチ、ハミ(コムル)、カラシヤル、カシガル、ホータンの九區を設けて今日に及むのである。
- 一、本編の譯者は資料室囑託山下義雄である。

昭和十二年十月

産業部資料室北方班

度量衡換算表

材積 (木材)	容積	重量	面積	距離	區分
一立方 米	一フ ツセル	一フ ン ト	一「ヘク ター ル」 一「デ シヤ チン」	一「リ ー ゼ ン」 里	ソ聯單位
二尺 九 九 四 八	〇石 一 九 五 三	〇石 一 〇 九 二	一町 〇 〇 八 三 一町 〇 一 六	七尺 〇 四 〇 九	日本尺貫法
一立 方 米	一立 方 米	一 〇 〇 〇 〇 一 六 三 八 一 〇 四 〇 九 五	一〇、〇〇〇平方 米 一〇、九二五平方 米	一 〇 〇 六 八 一 〇 六 六 八 一 〇 三 三 六	「メ ー ト ル」法

新疆經濟要覽

目次

第一章 政治

- 一 新疆近代の略説 一
- 二 住民の社會的構成 三
- 三 新疆政府 四
- 四 行政區劃 四
- 五 裁判法 五

第二章 地理

- 一 地域 六
- 二 境界 六
- 三 地勢 六
- 四 山嶽 六

目次

五 沙漠……………七

六 オアシス……………七

七 河谷……………八

八 河川及湖沼……………八

九 氣候……………九

十 降水量……………九

十一 土壤……………九

第三章 住民

一 人口數……………〇

二 人口密度……………〇

三 民族別人口……………〇

四 宗教……………〇

五 住民の生業……………三

六 出稼と入植……………三

第四章 一大經濟地帯……………一四

第五章 農業

一 オアシス農業地帯……………一四

二 遊牧畜産地帯……………一五

一 總説……………一七

二 農地……………一七

三 地方別に見た作物分布……………一八

四 作物の種類と其分布……………二〇

五 農業技術……………二二

六 棉花……………二三

七 畜産概説……………二六

八 家畜の種類……………二六

九 牛……………二六

十 緬羊……………二七

十一 山羊……………二八

十二 駱駝……………二八

十三 馬……………二八

十四 驢馬、豚及大鹿	二八
十五 家畜の頭數	二九
十六 畜産品	三〇
十七 食用家畜	三〇
十八 羊 毛	三一
十九 山羊皮、羊皮、仔羊皮、仔山羊皮	三一
二十 大皮革	三三
二十一 腸及其他の畜産品	三三
二十二 養蠶業	三三
二十三 毛皮業	三四
二十四 林業	三六
二十五 漁業	三七
第六章 工業及手工業	
一 概説	三八
二 天然富源及採鑛業	三九
(一) 金	
(二) 銀、鉛、亞鉛	
(三) 貴石及半貴石	
(四) 鐵	
(五) 銅	
(六) 石 炭	
(七) 石 油	
(八) 其他の鑛産	
三 加工々業	四二
(一) 纖維工業	
(二) 皮革工業	
(三) 獸毛加工工業	
(四) 線 綿	
(五) 食料工業	
(六) 其他の工業部門	

第七章 運送及交通

一 道 路	四六
二 交通路の方向	四六
目次	五

三	北部新疆の交通路	四七
四	北部新疆から東部支那に至る通路	四九
五	南部新疆の通路	四九
六	印度、アフガニスタンへの通路	五〇
七	自動車輸送	五一
八	自動車探検隊	五一
九	航空連絡	五二
十	水運	五二
十一	運賃	五三
十二	輸送方法	五五
十三	無電、郵便、電信、電話	五五
第八章 金融財政及借款		
一	貨幣制度	五六
二	銀行及金融機關	五九
三	歳計豫算	六〇
第九章 貿易		
		六二

一	新疆市場	六二
二	商務會と地方商業資本	六三
三	外國資本	六五
四	關稅政策と關稅	六五
五	新疆の外國貿易	六八
六	對印度貿易	六九
七	支那本土との貿易	七〇
八	アフガニスタンとの貿易	七一
九	ソ聯邦との貿易	七二
第十章 輸出商品		
		七四

一	獸毛	七四
二	生皮革	七四
三	棉花	七五
四	生畜	七六
五	蠶絹	七六
六	絨氈及フェルト	七七
目次		七

七 毛皮及生毛皮 七七

第十一章 輸入商品 七九

一 纖維工業品 七九

二 砂 糖 八〇

三 石 油 八〇

四 金屬及金屬製品 八一

五 農用器械 八二

六 磷 寸 八二

七 硅酸製品 八三

八 其他商品 八三

第十二章 度量衡 八五

一 重量々目 八五

二 長さ量目 八六

三 穀類量目 八六

四 面積量目 八七

五 地方の度量衡 八七

附、引用文献 八八

新疆經濟要覽

第一章 政治

一 新疆近代の略説

今日の支那新疆省の地域には、古くから北部には、オイロート族(チロロス、オレート、ドッボート、ホシエウート、トルゴウート)、南部には、ウイグル族が住んでゐる。オイロート族とウイグル族が、支那に征服されるまでは天山北方に遊牧封建部族たるチュンガル(準噶爾)汗國が在り、南方にはチュンガル汗に隸屬する七つのウイグル定着封建土侯國ホータン(和闐)、ヤルケンド(葉爾羌)、カシガル(喀什噶爾)、アクス(阿克蘇)、クーチヤル(庫車)、トルハン(吐魯蕃)及コムール(哈密)があつた。

支那の軍權的封建官僚政治(清朝を指す)は世襲財産と高利貸的商業資本の市場を獲るため、チュンガルのタイシヤ(武將)ミウイダルの分封土侯の内外の鬭争を利用して遠征軍を組織し、チュンガル汗國とミウイダル諸侯を征服して新疆總督を置いた。

十九世紀に至り、資本主義國は支那を半植民地化した。一八五一年帝政露西亞は支那に對し、クリヂヤ條約を強ひ新疆を無關稅貿易地として開放し、クリヂヤ(伊犁)及チュクチャク(塔城)に露國領事の管轄する治外法權的在外商館を興した。

新疆の植民地化——支那の封建領土化——これに次いだ帝政露國資本の滲透は、從來の方法即ち封建的生産方法に基く地方の小農と小牧養者の搾取を強化するに至つた。支配階級即ち支那の藩司、莫大な世襲地を與へられた滿洲旗人、土着の回部王公及部族的封建上層部は、土着の小農と小牧養者の基本大衆を慘酷に搾取した。小農、小牧養者は賦役、重税、暴利、賄賂に耐へ兼ねてその壓迫者に對抗して立上つた。同時に土侯及部族的封建上層部の利害は、土着の支配階級を驅つて支那の封建諸侯との鬭争に赴かした。かくして叙上の諸關係は、一八六二年「回教」叛亂を惹起せしむるに至つた。叛徒は新疆に於ける支那政權を顛覆して伊犁地方に、タランチン回教國を迪化・塔城地方に準噶爾汗國を、又東土耳其斯坦にデトイ・シヤアル回教會長國を作つた。

露國の專制政治と英國の資本主義とは略取と植民の目的を以て、新疆土民の叛亂を利用した。露國は國境の安寧保持「國內の秩序回復」に就いて支那を援助するてふ口實の許に、一八七一年タランチン會長國に戰を宣して之を亡し、伊犁地方を占領した。英國は、アルトイシヤアルの「獨立」承認の舉に出でその回部王公ヤクブ及その他を買収して、印度より中央亞細亞に至る途上に緩衝保護國を設定した。

英國の資本主義と露國の專制政治とに操縱された各種叛亂團體間の内争は、一八七六—一八七八年にデトイシヤアル側の敗退となつたが、更に新疆に到着した左宗棠の支那軍隊の爲に殲滅された。こゝに至るまでに露國の東方政策は、決定的敗北を喫した。すなはち一八七八年の伯林會議に於て近東及土耳其斯坦より印度への大進政策は芟除せられたのである。この失敗の結果、露國の專制政治は英國に讓歩して、一八八一年、彼得堡に於て支那との條約を調印するを餘義なくされた。この條約に依つて露西亞は、曩に占領した伊犁東部地方を支那に返還し、且支那の喀什噶爾領有を確認した。同時に新疆は對露、對印度の通商に開放された。

露國の十月革命は帝國主義の植民的壓迫から新疆を解放した。ソヴェート政權は露專制政治が支那に強要した不平

等條約を廢棄して平等の權利に基いた經濟的及政治的關係を兩國間に設定した。而して最近は日本及英國の帝國主義の進出に目醒しいものがある。

帝國主義者の主要目的は、新疆境域に「獨立した」そしてソ聯邦に對する帝國主義者の攻撃基地となるべき緩衝國を創設することにある。

一九三一年哈密地方の回教部族と支那官憲の間に衝突が起つた。これは支那官憲が昔から保存された部族の權利（遊牧民に對する課税、部族の軍隊維持）を剝奪しようとしたことに起因する。帝國主義者は、數多の回教及東干の軍將を回教國新疆の「獨立」戰爭に誘入するため、この衝突を利用した。

新疆の住民は殆ど四十年に亘る深刻な内争の渦中に投ぜられ、ために新疆の多數地方は疲弊し、その經濟は全く破壊された。

一九三三年迪化に新地方政權が出現し、地方民族との關係が調整されて、國內鬭争の終熄に資するところがあつた。

二 住民の社會的構成

新疆の住民を社會的構成上から觀るに次の如く分けられる。

- (一) 封建地主——王侯、回大商人、回小地主、役人、回僧、ラマ等。
- (二) 農民——小農、小牧養者及勞役農。
- (三) 高利貸商人及新興工業ブルジョア——ソウダゲル、ド・カンダル、アルプサトル、セールラップ、ヂヤザンホル、レウエンデ、手工業工場及製造工場企業型の工業家。
- (四) 職匠。

(五) キシラーク(土耳古族の冬留する村)アウル(高架索型の村)と密接な連關を有する少數の都市プロレタリア

三 新疆政府

一九二二年まで新疆は、滿洲朝の代表たる都統に支配されてゐた。一九二二年から一九二八年まで督軍に、一九二八年から一九三三年まで省主席に治められ、地方民族の代表は政府に参加するを許されなかつた。一九三三年に至つて、南京政府が任命した省主席を首班とし地方民族の支配階級の代表から成る新政府が組織された。

四 行政區劃

新疆の行政區劃は(一)烏爾木齊區(迪化)(二)阿爾泰區(阿山)(三)塔爾巴哈臺區(塔城)(四)伊犁區(伊犁)(五)阿克蘇區(阿克蘇)(六)哈喇沙爾區(焉耆)(七)喀什噶爾區(克什)(八)和闐區(和闐)(九)哈密里區(哈密)の九區に分れてゐる。

而して區には區長官が在り、區の行政は區長官に屬する。外國代表者の居る區即ち喀什噶爾、伊犁、塔城、阿爾泰の四區に於ては區長官が外交代表を兼任する。區長官は、

(一) 警察行政 (二) 稅關 (三) 縣長業務の監督を管掌する。

各區は之を縣に區劃する。縣長は省政府によつて任命され、縣行政を掌る。縣長は直接區長官に隸屬し、縣下の稅賦の課徴、都市道路の整備、警察、裁判を掌り、又若干の縣に於ては衛戍司令官を兼ねる。

縣は之を郷に分つ。キシラークと都市には、縣長が豫め指定する候補者中から住民が形式的に選舉する長老が居る

町村長は地租及現物稅の徵集、小争議の解決、縣長の委任事項を掌る。町村長は輔佐——ミラブを有する。ミラブは配水及水利争議の解決に當る。

遊牧民に對する行政は別個である。蒙古人(チャハルミオント)は兩翼に分れ、各翼の頭首をウクルダイといふ。各翼は、スムーナに分れ其の長はウクルダイに服屬しチャングミいふ。チャングの下に十戸長(ボシコ)が居る。ウクルダイミチャングは、町村長老ミ同一の役目を遂行する。トルゴウートは(一)カラシャール(二)コブク・サウル(三)シホース(四)ブルントホイの四土侯國に分れてゐる。ホシウート族はカラシャルのトルゴウート土侯に隸屬する一土侯國を成してゐる。

右の四トルゴウート土侯には、夫々諸族の代表者たる人のトスラクチ(主席代表)が居り、その政務所がある。これ等の土侯國は直接省政府に隸屬してゐる。カザック人ミキルギズ人はウクルダイによつて治められてゐる。彼等は、血族關係からアウルに分かれ、アウルは選任のアクサカール(村長)によつて治められ、アクサカールはウクルダイに、而してウクルダイは縣長に服屬する。

五 裁判法

新疆に於ける最高司法權は省長に屬し、高等裁判事務は司法委員が專管する。地方上級裁判所權は縣長に屬し、殺人罪、國事犯、職務違犯に關係する事項及政治犯罪等を處斷する。小事件は夫々土着の判事が審理する。即ち回紇の間在つては回教法典に據りカジ(回司法官)の手を以て、蒙古族の間在つては慣習法に據り王侯の手を以て、キルギズミカザックの間在つては成文法「ウリクンニエレチエ」に據りカジに依つて處分される。

第二章 地理

一 地 域

新疆は、支那諸省中最大の省で、その面積は、百四十二萬六千平方秆である。

二 境 界

新疆は、北及北東に於て蒙古民族共和國に、西方に於てカザック、キルギズ、タチクの各社會主義共和國に、南西に於てアフガニスタンに、南方に於て印度、カンヂウト、ナガール、西藏に、東方に於て甘肅省、青海省に接境する。

三 地 勢

新疆は、四面山脈に圍境され、東西に走る天山々脈を抱く大高原を成してゐる。その南北は四方山脈に圍まれ其山麓にオアシスの散在する一大沙漠を形成し、北半は西部に山嶽を擁する壤土質・溫地性草原を成してゐる。

四 山 嶽

新疆の北東には、蒙古・亞爾泰系山が聳え、西方には亞爾泰山系、タルバガダイ山系、バルリック山系及セミスタイ、ウルクシヤル、ヂヤイル、マイリ、アラタウの山嶽が屏立する。天山は、全新疆を西東に横斷し、西方に於て亞爾泰山脈及ザライ山脈に達し、亞爾泰山脈の南方にはサルイク山系を派出してゐる大バミール高原が横はる。更に

遠くカラコルム、崑崙、アルツインタグ、クルクダグの巨嶽が崛起する。

五 沙 漠

(一) タクラマカン沙漠は、新疆の南部を占め廣袤約三五萬平方秆。(二) 哈密沙漠は、面積約五萬平方秆。(三) ツォストインエリステ沙漠は其の面積、哈密沙漠を略ぼ伯仲する。タクラマカン沙漠は、荒寥無人、單だヤルケンドゥダリヤ、ホータンダリヤ及チルチェンダリヤの上流に放牧をみるのみである。この沙漠の周圍には、トグラク森林帯が環狀を成して續いてゐる。哈密沙漠ミツォストインエリステ沙漠は稀にヤハズアザミ(譯註：學名 *Elymus* plantum) サクサウール(譯註：燃料・指物材料となる中亞亞植物。學名 *Anthrophytum Ammodendrum*) チンギリ(譯註：土語名、不詳)を見る。

六 オアシス

崑崙山脈、カラコルム山脈、バミール高原及天山の麓地にはオアシスが散在する。其主要なものに、(一) 面積約二二平方秆のチルチェン、(二) ニーヤ、ケリヤ及チーラ面積合計約四五六平方秆、(三) 面積約一、一四〇平方秆を有し、最も大なるもの一たるホータン、(四) グーマ及これに接近する二オアシス即ちザンダヤミピアマ——面積合計約二二八平方秆、(五) カルガイク及これに接近する二小オアシス即ちククリヤールミベシヤルイク、面積合計約四五六平方秆、(六) ヤルケンド——新疆最大オアシス中の一にして、面積約一、三七〇平方秆、(七) ヤンギルギサル——面積約六三平方秆、(八) カシガル並これに連なるヤンギルシヤール、ハンアルイク、アルト。イシ、アストイン、ムーシン及ウバル等の群小オアシスを合し面積約二八五〇平方秆、(九) マラルバシ——面積約二、八五〇

平方秆、(一〇) アクスウ並にこれに連なるウチルトルファン、面積合計約一八二四秆、(一一) バイ——並にこれに接する小オアシス——サイラムを合し、面積約二六七平方秆、(一二) クーチャ——面積約一四二平方秆、(一三) シャヤール——面積約六〇秆、(一四) クールリヤ——面積約五七平方秆、(一五) アダール——面積約一一四平方秆、(一六) カラシアール——面積約一二〇平方秆、(一七) クーニヤルトルファン並に三小オアシス——ルクチュン、ビーチアン及トクスンを合し面積約二〇〇平方、(一八) ハミ——面積約一一〇平方秆が在る。

七 河 谷

新疆南部に於ける最も著大な河谷は(一) ラスケム(二) サルイコル山に於けるタダドムバシ(三) 天山に於ける大ユルドズ及小ユルドズ(四) クーニヤルトルファン以西のルクチュン河谷であつて、北部に於ける最大河谷は、マナス、シホース、イリイ、エメル及黒イルチシ河のそれである。

八 河 川 及 湖 沼

新疆に於ける主な河川ミ湖沼は、(一) チェルチェンダリヤ河——カラアルク湖に注ぐ、(二) ケリヤダリヤ河——タクラマカン沙漠に流れを失ふ、(三) ホータンダリヤ河、(四) ヤルケンドダリヤ河、(五) アクスウダリヤ河、右(三)、(四)、(五)の三河川は合流して、塔里木河となり、ロブノール湖に注ぐ、(六) 黒イルチシ河——ソ聯邦領域のザイサン湖に流入し、クウイルチシ、クラン及アルチュム等の支流を有する、(七) ウルンダウ河ウリウングル湖に注ぐ、(八) エメリ河——ソ聯邦領域のアラクリ湖に注ぐ、(九) マナス河——テリノール湖に注ぐ、(一〇) パラリターラ河——エビノール湖に注ぐ、(一一) 伊犁河——テクス及クングス兩大河ミ合流してソ聯邦バルハシ湖に注ぐ。

九 氣 候

氣候は嚴に大陸的である。夏熱、冬寒。晝暑、夜冷。夏冬、晝夜の寒暖の差が劇しい。七月の平均温度は、北方から南方に向ふに伴つて攝氏(十)二〇度から三〇度に及ぶ。一月の平均温度は、攝氏(一)二度乃至一〇度である。

一〇 降 水 量

降水量は殊に南部に於て尠なく、絶対湿度五・一一五・三耗、相對湿度二九—六二耗である。北部地方に於ては降水量は可成り多いが、尙且非灌溉農業には不充分である。山嶽地に於てのみ非灌溉耕地播種に充分な降水量を持つ。

一一 土 壤

オアシスに於ける土壤は黄土を、河谷に於けるそれは壤土質を基調とする。而して北部地方に於ける土壤は、主として含鹽粘土質である。

第三章 住民

一 人口數

新疆には、總數約四百萬に上る十四民族が住んでゐる。一般に統計としての人口調査は、新疆には行はれてゐないから、右の人口數も極めて概算的である。

二 人口密度

一平方秆に於ける人口密度は約二人であるが、それは地方によつて非常に相異してゐる。即ちタルバガタイ地方ミアルタイ地方に於ては、一平方秆約三・六人、南部諸オアシスに在つては、一平方秆二・一〇人乃至二七〇人である。

三 民族別人口

新疆の民族別人口は大要次の如くである。

民族	千單位數	總人口に對する比
ウイグル(回紇)	二、四〇〇	六〇・〇
支那人	四八〇	一二・〇
蒙古人(チャハル、オレイト、ホシオト及トルゴウイトを含む)	約 三五〇	八・七

哥薩克(キレイ、ナイマン、アルバン及キザイ)	三二〇	七・七
東干	二四〇	六・〇
滿洲人(シボ、ソロン)	八〇	二・〇
キルギーズ	六〇	一・六
露西亞人	三〇	
タジック	二〇	
ウズベック	一五	
印度人	八	二・〇
タタール	二	
ジブシ	二	
其他	三	

ウイグル人は、大部分オアシスミ伊犁河谷に住むでゐるが、この他新疆の殆ど全都市、村落に居らざる所はない。蒙古族の遊牧地は下の如くである。(一)天山カラシャル土侯國のトルゴウイト——大ユルズ、小ユルズの河谷、(二)シホス土侯國のトルゴウイト——マナス河からボロホロ山支脈に至る天山(イエレン||ヒバルグ)の北斜地、(三)コブク||サウル土侯國のトルゴウイト——ウルカシャル地方、オルフ湖、ヂヤイル湖地方、テリノール湖、デュレン湖、サルアルト湖地方、ウリユングル湖及黒イルチシ河地方、(四)ブルントホイ土侯國のトルゴウイト——ウレンダ河畔及其上流、ブルグン河及チンギリ河々畔、(五)エチネ——カラシャルのトルウイト土侯國以西、天山の南斜地、(六)ドルブンスムンのオレイト——テクス河及クングス河の上流、(七)ズルガン・スムンのオレイト——テクス河上流兩岸、(八)アルバンスムンのオレイト——ボロホロ山脈の南斜地ミカーシ河及其の諸支流沿岸、(九)

ウシミスムンのオレート——ウクラシヤール山ミヂヤイル山、(十)ホシオート土侯國の住民——カラシヤールのトルゴウト土侯國以東、ウルムチートクスンの幹道に至る東方面、(十一)チャハール——バーラール河々谷。滿洲族のシボ(錫伯)は——伊犁區の惠遠城に、ソロンは伊犁河左岸の都市及要塞地點、並に迪化、マナス、塔城地方に、ダウルは——サイダン、アリムト、ドアラ及ケレスムンに住む。

コザック族のキレイは阿爾泰地方、即ちベムゼック河カバールチュム河の上流、スンダイ河の上流、クラシ河、黒イルチシ河、青イルチシ河、ウルダン河の上流及ムズータウに、ナイマン(乃滿)は——エメリ河々谷、マイリディヤイルミバルルイクの兩山に、アルバンミキザイミは——ムズータウ山、ツアグマ河々谷、テメルリク支流の上流、カシ河の左岸、クングス河畔、テメルリク及トラースウ河沿並にキズイムチクに住む。

支那人は、新疆の凡ゆる都市、農村に植民してゐるが、その基本大業は、ウルムチ地方の主として都市ミ要塞地點に住む。

東干人は、南部に於てはカララクリ、伊犁地方に於ては、ロツァゴウ、スイド、ツインシユイヘンザ、チュンバズイ等の諸地及アブラシ、アルト、サドイクユヂ、ダラダント、及エルドアン等の諸聚落地に住む。この他東干人は迪化地方の迪化、庫車、マナス、哈密の諸都市及それ等の郊外村落並に新疆の他都市に散居する。

キルギズは、大凡クーチからサンヂウ河の上流に至る間のカンガル山嶽地帯を占める。

タヂクは、カシガルの西部地方即ちタシクルガン、タガルマ、ワーチ、マリオナの諸河谷に住し、又マリオナからカサラブに至るヤルケンドーダリヤ河畔並にキリヤンスウ、上部チズナブ、パフヌウ、チウフシ、ユルガ、ウソサ及グソサ等の諸河谷に散布する。

ウズベックミタートルは、喀什噶爾、迪化、伊犁及塔城等の都市に於ける舊露國商埠地に處る。

印度人は、専ら和闐、^{カシュガル} 馮車、^{コホカトル} 葉城及喀什噶爾に住する。

チプシーは、喀什噶爾道の諸都市に、小團を成して散布する。

露國人は、伊犁地方、阿爾泰のカルガトン地方及伊犁、迪化、塔城の諸市に住する。

四 宗 教

ウイグル、コザック、キルギズ、東干、タヂク、ウズベック、タートルは回教を信じ、蒙古人は喇嘛教を、支那人ミ滿洲人は儒教ミ佛教を、印度人は佛教及回教を奉ずる。

五 住民の生業

住民の基本生業は、農業、牧畜、手工業及商業であるが、農民が其の大多數を占める。

六 出稼と入植

以前は、年々棉花採收季に新疆からウズベック社會主義共和國に出稼する傭人、貧農が約一〇萬人に達し、その一部は出稼地に定住した。

入植は支那本土、主として、隣接の甘肅省から行はれてゐる。

一九二九年から一九三二年までに、約三萬の支那人が新疆に移住してゐる。尙省政府はこの入植を獎勵してゐる。

第四章 一大經濟地帯

新疆は、オアシス農業地帯と遊牧畜産地帯の一大經濟地帯に分かたれる。

一 オアシス農業地帯

オアシス農業地帯は、崑崙山、カラコルム山脈、バミール高原及天山の諸山麓に散在してタクラマカン沙漠を繞つて環狀に連續する全オアシス、それから吐魯番、ビチヤン、ルクチウンの諸地方及シホ（烏蘇）に達する天山北斜地の諸オアシス並に伊犁河々谷に互る。

オアシス農業地帯の占める全地域は、約九一三、五〇〇平方秆であつて、そのうち沙漠及砂地が、約三九二、八〇五平方秆（四三％）、鹽土—約四五、六七五平方秆（五％）、サイ（譯註：土質不詳）——約一二一、四九五平方秆（一三％）、山嶽——三二八、八六〇平方秆（三六％）、森林——六、三九五平方秆（〇・七％）、水面——五、三九四平方秆（〇・七％）、及オアシス——一一、一八〇平方秆（一・三％）である。

オアシス農業地帯の氣候は、夏季は暑く、その平均温度は、羅克春の攝氏（+）四二・七度、沙車（+）二七・六度、喀什噶爾の（+）二五・三度、降水量は五——六耗といふ最小限度であつて、屢々塵霧をみる。冬季は風多く、降雪量鮮く、その平均温度は、羅克春の（-）二・八度、沙車の（-）四・九度、喀什噶爾の（-）七・六度である。但し冬季間は短く、十二月に始つて二月に終はる。

上記の廣袤に算する農戶數約四三萬三千、之を、その土地所有額に従つて別てば、略次の如くである。

第一類	全然無地の者	六〇、〇〇〇戶	一四％
第二類	土地一畝乃至一〇畝の所有者	九九、〇〇〇戶	二三％
第三類	土地一一畝乃至三〇畝の所有者	一五一、〇〇〇戶	三五％
第四類	土地三一畝乃至六〇畝の所有者	六二、〇〇〇戶	一四％
第五類	土地五〇畝乃至一〇〇畝の所有者	四四、〇〇〇戶	一〇％
第六類	土地一〇〇畝以上の所有者	一四、〇〇〇戶	三％
總計		四三〇、〇〇〇戶	一〇〇％
所有類別別に見た土地計數は、略次の如くである。			
第二類	九萬九千戶の所有	約 四九六、三〇〇畝	二・四％
第三類	四萬二萬三千戶の所有	約 四、七五九、二七五畝	二三・三％
第五類	四萬四千戶の所有	約 三、三六八、四七五畝	一六・五％
第六類	一萬四千戶の所有	約 一一、八二七、五五〇畝	五七・八％

オアシス農業は、人工灌漑地で行はれる。

その基本的農業型態は、勤勞農民の自作並に農民及作男の大部分をば、封建的地主領、寺領、商人所有地、農村地主の土地に於ける債務奴隷化してゐるところの小作制度であつて、王侯及アクスイク（出仕貴族）の土地に在つては各種形式の勞役制が保存されてゐる。

二 遊牧畜産地帯

遊牧畜産地帯は、阿爾泰區、伊犁區の全部及天山、バミール、サルイコル、カラコルム及崑崙の、細長い諸山麓を抱擁する。畜産業者の冬籠地及牧地として占める廣袤は、四〇萬平方秆を超え、この面積に散布する遊牧民世帯數

は、約一四萬にして、之を家畜所有數に従つて類別するに次の如くである。

第一類	一五〇頭まで	約	七〇、〇〇〇	五〇・〇%
第二類	一五〇乃至六〇〇頭	約	四五、〇〇〇	三二・〇%
第三類	六〇〇乃至二、〇〇〇頭	約	二五、〇〇〇	一七・六%
第四類	二、〇〇〇頭以上		一、〇〇〇	〇・四%

新疆に於ける牧畜業は主として遊牧である。南方に於ては半遊牧生業をみる。領主の畜産業はハムデルカ及マルチヤ即ち隸農アイラト（小農）の手によつて行はれる。アイラト大衆の牧畜はアイラト自身の勞力に倚る。商人の畜産經營は債務奴隸たるアイラト貧民の勞力に依つて行はれる。

新疆の畜産經濟地帯は、十八世紀の後半以後、支那人の基本的植民地帯となつてゐる。遊牧民地帯は、一五〇年以前に互つて、移民、流刑人及旗人軍隊の來住地となり、良土が選擇されて、都市が設けられ、農業が行はれた。遊牧民は山地に壓迫され、彼等の地域は、次第に減縮した。例へば遊牧畜産地帯には、バルクーリ、ウルムチ、マナス、シーホ、クリヂヤ、スイドゥン、チュンバンズ、チグダチャーク、ドルブリヂン、シヤラリスメ等の都市が興り、これ等の都市を中心とする地方及河川沿岸に移民農業が發達した。遊牧畜産地帯に於ける農業には、地主農業、デクハーニン（譯註トトルクメニスタン及ウズベキスタンの農夫）農業、旗軍の舊將兵農業及克蘭チン（ウイグルの隸徒デクハーニン）の農業がある。地主の土地は、債務奴隸化したアイラト（小牧畜者）及タランチンの半隸農、デクハーニンによつて耕作され、極めて僅少の部分が雇傭農業勞働者の手によつて耕作される。

第五章 農 業

一 總 說

新疆の農業發達途上の主要障礙は、本地方の植民地的地位及農村に於ける傳統的な封建的關係——封建隸農的搾取、農民遊牧アイラトの債奴化等——である。新疆農民の大部分は、地主の所有地、國有地或は免租地（譯註ト回教の寺院・學校の）に於ける小作農を營んでゐる。

最も普遍的な小作條件は、ウルタ即ち分益、クタ即ち金納であるが、前者がヨリ多く行はれてゐる。農民及遊牧民より地主の徵收する地代は、これ等の者の必需生産品の大部分に相當する高地代であり、また彼等の支拂ふ利子は全く高利貸的利子であるため、農村、部落に於ける生産力の發達を杜塞してゐる。従つて當然本地方の農業及畜産業は、今日迄極めて低い發達水準に在るのである。

新疆の農業は、水利不可分關係にある。人工灌溉は、新疆農業の基礎であるが、全ての灌溉組織は、封建地主に高利貸の手に握られてをり、勤勞農民搾取の有力なる武器となつてゐる。

農民耕地の級數的細分、地主の遊牧世帯搾取、農民及遊牧民の全般的極貧化並に高率課租等は、相合して、農業畜産業の發達を不可能ならしめるのみならず、それらを益々衰退せしめつゝある。

二 農 地

農業に適する新疆の土地總面積は、概算して最少限六二〇萬ヘクターである。併し乍ら現耕作土地の總額は、近年

甘肅省移民が入植した官有地をも包含して、一九三二—一九三四年事變前に於て計一三〇萬ヘクター即ち可耕地面積の二〇%であつた。この可耕地總面積には人工灌溉地も然らざるもの兩者が入つてゐる。

然し大黄土層を有するタクラマカン沙漠に、灌溉上極めて僅少の利用に止まつてゐる塔里木河を考慮するならば、可耕地資源は著しく増大するわけである。

三 地方別に見た作物分布

一九二二年以後の耕地面積に關する政府公報は、新疆には無い。地方別乃至作物別の以下引用の資料は、非公報的資料に據つたものである。地方政廳は、徵稅制度に關聯する或る考慮上から實際の耕地面積は通常之を秘密にするこゝにしてゐる。隨つて耕作面積の總額にしても、その地方別、作物別の分布にしても、極めて概算的、近似的なるを免れない。

總耕地面積は、ほとゞ下掲の如き地方別分布をこゝが出来る。

支那アルタイの生産地方は、シャラスメ縣、マイコブチ、ガイ縣であつて、其處には灌溉農業が行はれてゐる。ブルントホイ及アルチム地方に於ては、耕地は僅かに小オアシスとして散布してゐる。アルタイ地方に於ける播種穀物は此地方の需要を満すに足らず、之を他地より輸入せなければならぬ。従前は、帝政露西亞からの輸入に俟つたが世界大戰後は、マナス及シャワンからの輸入（米及小麥）によつて充たされて居る。

區	名	耕地面積(單位千ヘクター)	百分	率
阿爾泰區		三〇		二・三

塔城區	伊犁區	迪化區	東トルキスタン	計
六〇	二〇〇	一七〇	八六〇	一,三三〇
四・六	一五・一	一三・〇	六五・〇	一〇〇

塔城區に於ては、一九二八年まで、耕地全面積は二萬ヘクターに達せず、地方産穀物の不足は輸入に仰いでゐた。

右年度以後は、本區の主として半遊牧民が、バルイク山、タルバガタイ山及ウルカシヤール山下所在の土地に、非灌溉播種式を以て、生産する栽植地を擴大しはじめ、一九三二年には、播種面積は既に約六萬ヘクターに達した。

伊犁區は、北部新疆の穀倉である。播種地總面積の約四分の三は、主として伊犁河及其支流クングス、テクス、カシの諸河谷、並にバラリタル河谷に存在する。これ等の河川及其支流（ベリチ、スイド、ンカ、ヂヤルガラン等）よりは、耕地灌溉のためアルイク（灌溉溝）が通じてゐる。其の最大灌溉溝は、カン溝であつて、延長一三〇軒、スイド、ンに達する。現時はこの灌溉溝は、バヤンダイ—スイド、ン間に於て泥塞や、崩潰があり、實際利用し得るものは延長七〇軒に過ぎ、その灌溉地の幅員は五乃至八軒である。これに次ぐ大灌溉用運河は、一九二二年伊犁を距る三五軒、チャブカン地方に設けられた延長七五軒の灌溉溝であつて、水を伊犁河にこり、滿洲移民（錫伯）の耕地を灌溉する。第三の灌溉溝は、矢張り伊犁河より水を引き、延長三五軒、クリン地方の稻田を灌溉するものである。

播種地として充分役立つ伊犁地方の面積は、一九三三年に於て、大約百十萬ヘクターを算した。即ち伊犁河谷—三五萬ヘクター、クングス河谷—一三萬ヘクター、テクス河谷—一六萬ヘクター、カシガル河谷

—八萬ヘクター、バラタル河谷—二〇萬ヘクター。

この他約一八萬ヘクターの非灌溉耕地を有する。併し乍ら耕されてゐるのは約二〇萬ヘクターであつて、そのうち一九三二年に播種されたのは一二萬五千ヘクターを出でなかつた。残餘は水の不足或は地力の消耗のため、休耕に付され漸次荒廢に歸して、定着遊牧民の牧地に利用されてゐる。

迪化地方に於ける農作物の基本中心地は、吐魯蕃のオアシス及シホーマナス地域である。コムル地方に於ける農業中心地は、哈密のオアシスである。山水を引いた灌溉方法によつて、七〇%が灌溉を得てゐる吐魯蕃オアシスに於ては、耕作面積は一九三二年までは約五萬五千ヘクター即ち迪化地方の全播種面積の三〇%に及んでゐた。

前掲の諸地方は、一九三二—一九三四年の兵亂の結果、現在は著しく荒廢状態に在るが、漸次復興に赴いて居る。

南部新疆（喀什噶爾區、和闐區及阿克蘇區の一部）は、省に於て最も人口稠密な地方で（一平方杆・二七〇人）、遊牧民は總計六%に過ぎない。住民の大多數は農業者である。新疆の他地方と異り、南部新疆に於ては、熱地とされ、耕作される可耕地は、著大の率に達する。然し灌溉組織は充分に備らず、其現在あるところの灌溉溝と山の落水利用溝は、極めて等閑に附されてゐる。

非灌溉播種は、新疆の南西地サルイコルに於て可能である。

南部新疆に於て最も明瞭に看取されることは、農民の土地喪失と貧困化である。

四 作物の種類と其分布

穀禾中、支那アルタイに於て耕作されるものは、小麦、大麦、燕麥、玉蜀黍、稷及豆類である。工藝作物中では、煙草（劣質の）のみである。而して罂粟の播種地としては、最良耕地約三千ヘクターが、之に利用せられてゐる。

支那アルタイに於ける灌溉耕地の穀禾收穫率は、種子一六疋に對し、夫々小麦—一二〇疋、大麦—一六〇乃至一九〇疋、燕麥—六四〇乃至八〇〇疋、稷—約一六〇〇疋である。

塔城區に於ては、アルタイに於けると同様の穀禾が播種される。非灌溉耕地の一ヘクター當り收穫は、小麦—二〇〇疋、大麦、燕麥—一・四疋乃至三・〇疋、玉蜀黍—一・三乃至二・二疋、稷—二・五乃至三・〇疋、馬鈴薯の灌溉耕地一ヘクター當り五乃至八疋、クローバーの一ヘクター當り收穫は、四乃至五疋に達する。

一九三二年に於ける塔城の播種地作別面積は略々次の如くである。小麦—二萬五千ヘクター、燕麥及大麦—一萬七千ヘクター、玉蜀黍—三千ヘクター、稷—二千ヘクター、野菜（馬鈴薯、蔬菜其他）—二千ヘクター、瓜類（西瓜、甜瓜等）—二千ヘクター、クローバー及クナーク（譯註：土語？不詳）—六千ヘクター。

伊犁區に於ける一九三二年の播種地の作別面積は、次の如くであつた。小麦—約八萬ヘクター（この中には約二萬五千ヘクターの非灌溉播種地を含む）、大麦—一萬五千ヘクター、稷—六千ヘクター、燕麥—五千ヘクター、玉蜀黍—一千ヘクター、米—八百ヘクター、高粱—百ヘクター、油脂作物（カラシ、ゴマ等）約五千ヘクター、ルーサン及其他の飼料草—五千ヘクター、其他の穀類並に野菜類、瓜類、トウゴマ、豆類、煙草、罂粟等約七千ヘクターであつた。一九三二年には、罂粟の播種地は、三千ヘクターに達し、一ヘクター當りの阿片の採收は六乃至一〇疋であつた。棉花作は、目下試験時代に屬し、總計數十ヘクターに過ぎない。各種の小麥類中、伊犁地方に於て専ら播種されるものは、春時クバンカ（南露の硬種小麦）、原地の黑穗種（カラクイリトイルク）及小麦の早種（「チウドムバ」）である。冬時麥の播種は、屢々凍死するため極めて僅少である。小麦の收穫は一ヘクター當り灌溉耕地に於て、普通一・二—一・三疋、非灌溉耕地に於て〇・五—〇・六疋であるが、豊作年には、冬時麥の收穫は二・五疋に達する。大麦の平均收穫は、〇・八—一疋、燕麥は〇・七—〇・九疋、稷は〇・八—一・〇疋である。米は、一ヘク

ター當り平均二・五瓩、玉蜀黍は生まで一・二——一・五瓩、ウマゴヤシは、一ヘクター當り五——六瓩である。馬鈴薯の收穫率は、クングス河々谷の黒土に於ては、植種量の七〇倍に達する。伊犁區に於て栽培される煙草は、低級にして、ヂェツイスイ種よりも遙に劣つて居る。

吐魯蕃のオアシスの主要作物は高粱であつて、全灌溉面積の五〇%の播種になつてゐる。之に亞ぐものは小麥の三〇%、其他の作物は、棉花、大麥、大麻、蔬菜類等である。

マナス地方に於ける最重要作物は米である。

南部新疆に於ける基本作物は小麥で、全播種面積の四〇%以上を占める。次は玉蜀黍の三〇%、米、高粱、蕎麥、豆類（豌豆、大豆、蠶元豆）及油脂作物（大麻、亞麻、ゴマ、アブラ菜）である。工藝作物では、棉花及中等以下の煙草である。

前記作物は、棉花ミ、大麻から採取される麻酔物たるアナーシヤ（譯註：中亞で用ひる阿片の一種、土語チャラス）を除いては、新疆境域外に輸出されない。他の油脂作物の栽培は、食用及燈用に供される油の製産を目的とするのである。亞麻、大麻の纖維は糞ミして用ひられ、稀に繩に用ひられる。

果樹園業は、新疆に於ては、到る處に發達し、殊にオアシスに於て盛んである。最良の果物は、吐魯蕃のオアシスに生産され、其處から甘肅省にまで輸出されてゐる。

五 農業技術

新疆に於ては、正しい輪作は行はれてゐない。水に不足する多くの地方に於ては、休耕式農業をこつてゐる。

支那アルタイの農業は二圃式である。穀物の播種期は四、五の二ヶ月、收穫期は八月である。農耕の全過程は古風を脱せず、耕耘は原始的の犁又は單に曲つた木に鐵の刃先を付したものを以て行はれてゐる。

塔城區に於ては一九二九年以降、ソ聯邦から農具を輸入し始めたため、農業技術に若干の進歩——特に大農戶に於て——を見るに至つた。ソヴエト農具が輸入されてゐる迪化區、伊犁區に就いても同斷である。（「商品取引」の項参照）。

伊犁區の農業に於ては、殆ど何等の肥料も用ひられてゐない。小麥の灌溉耕地の播種には、一ヘクター當り一三〇乃至一六〇瓩、非灌溉耕地の小麥のそれには、同じく一ヘクター當り五〇乃至七〇瓩、燕麥——一六〇乃至一八〇瓩、大麥——一四〇乃至一六〇瓩の種子を要する。

南部新疆に對するソ聯農具の輸出は、輸送條件上未だ涉かばかしく無い。疎耕にはオマーチ（譯註：土語？不詳）が用ひられ、手力耕耘にはケトメン（譯註：土語？不詳）が用ひられる。

六 棉花

新疆棉作の基本地帯は、迪化區の吐魯蕃地方、天山々脈以南に所在する諸オアシスである。吐魯蕃棉花地帯には吐魯蕃及ピチャの諸オアシス以外に、なほルクチン、ハンドン及トクスンが入る。棉花栽培の行はれる南部新疆の諸オアシスは、クルリヤ、アクスウ、ウチリトルファン、マラルバシ、喀什噶爾市の郊外、ファイザバード、メルケット、ハンリアルイク、ヤルクンド、ヤンギギサル、ホータン、グーマ及ケリヤである。タルバガタイミアルタイには氣候の關係で、棉花は栽培されてゐない。伊犁區には、一九三〇年以降米棉の試作が行はれて、成績頗る佳良であるが、目下のところ試験的の小面積に止まつてゐる。

新疆の棉花栽培は、最近十五ヶ年間に、非常に衰頽した。衰頽の根本原因は、基幹的灌溉水源が漸次封建的地主分

子の手中に歸し、其の結果、灌溉事業が全く放擲され、改修と清掃を缺くに至り、灌溉設備と水利が急速に悪化したことに在る。農民の水利上加へらるる債奴的隷農條件の強化は、農民の播種面積の縮小となつて顯はれてゐる。なほ新疆現下の經濟的恐慌も同様にこの播種面積の縮小に與つて力あるものである。因にこの恐慌の結果、棉作の収益率は穀禾栽培のそれ以下になつてゐる。

一九二二年以後棉作地面積に關する統計的數字を缺くため、面積の減少動勢乃至總じて栽植全面積を悉知することは不可能である。また計量單位たるチャリクミ畝が、地方によつて、それ／＼異つてゐることも棉作地面積の決定を困難ならしめる。併し乍ら棉花の總原料產出を二萬七千瓩とする一九三一年の數字を、現下棉花栽培の極めて不振の折柄一ヘクターの平均收穫が半瓩を越えることから推して、右年度に於ける新疆の棉花栽培の總面積は、大約四萬九千ヘクター即ち總耕作地の三・七％を算定される。この栽植面積と生産原棉を地方別に見れば略ぼ次表の如くである。

オアシス名	栽植面積(單位ヘクター)	原棉產出量(單位瓩)
トルファン、ビチャン及ルタチン	一一、八〇〇	五、四〇〇
トクスン及ハンドゥン	四、〇〇〇	二、〇〇〇
タル	二、六〇〇	一、三〇〇
アタスイ及ウチリトルファン	四、八〇〇	二、四〇〇
メル	六、八〇〇	三、四〇〇
ヤル	六、〇〇〇	三、〇〇〇
ファ	二、四〇〇	一、二〇〇

マ	二、〇〇〇	一、〇〇〇
ハラ	二、〇〇〇	一、〇〇〇
ホータン、グーマ、ケリヤ	三、〇〇〇	一、五〇〇
カ	一、八〇〇	九〇〇
其	一、九〇〇	九五〇
計	四九、一〇〇	二四、〇五〇

棉花收穫率の極めて低い原因として、既掲の原因のほか、施肥を全然用ひないこと、耕作の不良なこと、屢々颱風の襲來すること(トルファンのオアシス)、根切り蟲の被害、農事指導を缺くこと、種子更新の不足を上げることが出る。種子の撰様は、ソ聯邦輸入品によつて行はれてはゐるが、ソヴシントルグ(ソ聯邦新疆貿易)支部が地方棉業者を援助してゐる喀什噶爾地方までに止まり、より遠隔の地方には殆ど送達されてない。

西部支那棉花は米國種と在來種とに分かれる。米國種は主としてトルファンのオアシス及オアシス邊沿地方に栽培され、纖維の長さは二六——二八瓩であり、機械撰別を行つた在來種の纖維の長さは二二——二四瓩である。紡績上の性質からいへば、この地方の米國種は、同種、同格、同纖維長のソ聯邦よりも品位に於て若干落ちる。機械撰別の在來種のカシガル棉は、纖維の長さ二三——二五瓩、紡績用として優良である。

新疆棉花の大部分は住民の自家用(寬衣棉毛布、袋等)として、また棉羅紗、支那綿布、半絹布等を製造する手工業紡績業用として原産地に於て消化されてゐる。これ等の需要に供されるものはトルファン、クルリン及アタスイ地方に於て約二千瓩、南部新疆の南諸オアシスに於て、二千六百瓩、計約四千六百瓩である。殘餘はソ聯邦及甘肅省向輸

七 畜産概説

天然飼料の豊富は、農業に並んで現代新疆の經濟上基本的役割を演じてゐる畜産業の經營に大なる可能性を保障する基礎になつてゐる。然しこの大なる可能性も遊牧民の畜産經營上に於ける會社經濟的條件と密接に關聯する既述の諸原因によつて、未だ利用せられてゐない。遊牧及遊牧民の基本生業たる畜産業は、自然牧場に倚る原始的形態を以て行はれてゐる。定着農民の養畜は、副業的であつて専ら給料飼養的性質を帯びてゐるが、南部オアシス地方の養畜は主としてこの形態である。一九三四年までは、畜産業の發達に關して何等の方策も講ぜられなかつた。同年に至つて初めてソ聯側からの協力によつて畜産上に、獸醫學及動物飼養學的指導を行ひ、種畜を輸入し、交尾所の施設を見るに至つた。産馬業に對しては、政府に於て、國內に國營馬廠を設くる等若干の努力を示した。因にバルクトール、哈密其他の地方に於ける此種馬廠施設は、軍馬補充の目的を以つてなされたものである。畜産品關係から觀るに、北部地方は肉類の産出を主とし、南方は毛類の産出を主としてゐる。

八 家畜の種類

新疆に於て牧養される家畜は、牛、綿羊、山羊、馬、駱駝、驢馬、大鹿及豚等である。

九 牛

牛はキルギズ種と蒙古種の二基本種に分たれる。北部に於ては、その外貌がアウリエー種を想はせる牛を觀るが、

これは舊セミレーチエから新疆に入つたものである。八、九歳のキルギズ種牝牛の平均重量は、三八〇—四〇〇斤、蒙古種は四三〇—四四〇斤に達する。キルギズ種牝牛の泌乳量は極めて鮮い（二回搾乳の平均量—四・八乃至六斤）。蒙古牝牛の泌乳量は六—七・二斤である。定着的牧畜經營に在つては、右兩種共多少泌乳量を増してゐる。キルギズ種の肉は、所謂チエルクス型に屬する。牝牛の平均生體量中、純肉量は約四七%である。南部諸オアシスに牧養される牛は、専ら役畜として利用され、其堆肥は基本肥料になつてゐる。

十 綿羊

新疆の綿羊は、二基本種に分たれる。一は、肉用短脂肪尾のキルギズ種にして、他は採毛用大脂肪尾の蒙古種である。キルギズ種綿羊は、北部、カシガル區、アクス區及カラシヤル區の一部並にサルイコルに普及し、蒙古種に屬する諸亞種は、新疆の全地方に廣まつてゐる。キルギズ種の成牝羊の高さは—通常七五—八〇種、牝羊は—七〇—七五種である。而して生體量は、二歳（セク又はバイダク）—四五斤、三歳（クナン）—五三斤、四歳（ド・ナン）—六二斤、脂肪尾の重量は一〇—一二斤に達する。肉は極めて良質で、牝羊の平均生體量に對して純肉は—一二斤即ち四一%である。蒙古種牝羊の高さは、平均—七二—七六種、牝羊は—六三—六八種である。成牝羊の平均屠殺肉量は約二四斤である。蒙古種綿羊は、毛質及其他の外部的特徴に依つて、コグク種、ハミ、グーチェン種、クチャール種、カルガライク種、マラルバシン種及コータン種に分つてゐる。ハミ及グーチェン地方の綿羊は肉毛兼用種に屬する。クチャール種は、クチャール縣、バイ縣、クルリン縣及アクス縣に分布し、牝羊の高さは平均—六三—六七種、牝羊のそれは—五七—六七種、平均屠殺肉量二四斤である。このクチャール種綿羊の肉は市場價值を持たない。之はその脂肪が一種の汗臭を帯びてゐるからである。斯く食肉として不向のはコータン

縣、チュルチン、ニーヤ、クリヤそれからアクス、クチャール兩縣の一部に於て牧養されるコータン種羊も同様であるが、之は新疆に於て半粗毛を得る唯一の羊種である。

十一 山 羊

山羊は、普通のキルギズ種が牧養される。

十二 駱 駝

駱駝は、北部地方に於ては専ら單峯種が、南部地方に於ては双峯種が牧養される。騎乗用駱駝は、比較的収益率が少いため、餘り多くの牧養を見ない。故に新疆に於ては、除商輸送の基本を成す役用駱駝が大部分を占めてゐる。騎用駱駝は、大ユルドーズ、小ユルドーズの畜産地、テクス河、クングス河々谷、タルガバタイ區及支那アルタイに於て牧養される。

十三 馬

新疆に於て最も普遍してゐる馬種は、キルギズ馬と蒙古馬である。トルゴウート人が牧養する馳走力に於て有名なカラシヤール馬は、蒙古馬の亞種である。馬は運搬(駄用、鞍用並に農村役畜として)の目的以外に、遊牧民によつてクムイス(譯註:一種の乳酸飲料、營養價高く、結核諸病に用ひて卓効がある)醸造のために牧養される。

十四 驢馬、豚及大鹿

驢馬は新疆に於ては、單に運送用役畜として用ひられ、定着農家に於て飼育される。カシガルに於ては、小型のキルギズ種の馬に匹敵する身長驢馬が普遍してゐる。驢馬と馬の混血種(驢馬及カツイル(譯註:土語、不詳))は、主として南方に産する。養豚に従事するのは支那人に限られる。近年シヤラスメ地方には、袋角茸(譯註:強壯劑原料)を收穫するため大鹿の養鹿場が設けられた。

十五 家畜の頭數

統計調査を缺くため新疆に於ける家畜の現在數を知る精確な資料は存せない。照會回答調査に至つては、數字に甚しい矛盾を示してゐる。

間接的指數に基けば、綿羊、山羊の頭數は、極めて概算的乍ら次表に示す如くである(千頭單位)。

地 方 名	綿羊頭數	山羊頭數	全羊數	百分率
ウルムチ及ハミ兩區	二、一〇〇	三〇〇	二、五〇〇	二〇
支那アルタイ及タルバガタイ	三、五〇〇	五〇〇	四、〇〇〇	三一
伊 犁 區	一、六〇〇	二五〇	一、八五〇	一五
南 部 新 疆	三、八〇〇	五七〇	四、三七〇	三四

叙上地方別(殊に北方)家畜分布は、極めて概要的なものであり、且つ一九三二年——一九三四年の新疆兵亂(馬仲事件)前の期間に屬するものである。

照會調査資料に依れば、牛の頭數は約一四四萬五千であつて、その地方別分布は、支那アルタイ——五萬頭、ウル

ムチ——タルバガタイ地方一二萬頭、伊犁區三二萬五千頭、南部新疆——九五萬頭である。同一の資料に依る馬の頭数は七〇萬で、このうち支那アルタイ——六萬五千、タルバガタイ區——五萬、ウルムチ區——五萬、伊犁區——一四萬、東トルキスタン——三九萬である。駱駝の總数は七萬五千乃至八萬頭、アルタイ區——一萬五千、タルバガタイ區——四千——ウルムチ區——二萬二千、伊犁區——五千、南部——三萬乃至四萬頭といつた分布である。

十六 畜産品

牧畜生産品は、新疆の外國貿易にまつて根本的意義を有する。このことは新疆のソ聯邦への總輸出額に對する畜産原料品の比較によつて明かである(千テネルウオネツ留單位)。

ソ聯への輸出總額	畜産品の輸出	百分率
一六、〇三三	一三、〇一一	八一
一〇、二二二	九、二二二	九〇
一一、三〇五	一〇、二五七	八三
一八、八三三	一四、八〇一	七九
五、九四五	四、九八九	八三

家畜の事實頭數に關する精確な資料を缺くため、畜産原料品の生産額に就いての算定は、勢ひ概數的ならざるを得ない。随つてその生産を地方別に見ることも、同様大要的に行ひ得るのみである。

十七 食肉用家畜

屠殺用獸畜の可能輸出頭數は、大略次表の如くである(千頭單位)。

各地	牛	羊及山羊類
アルタイ區及タルバガタイ區	一三	一七〇
伊犁區	一〇	一三〇
阿克苏・カシガル地方	二	四〇
合計	二五	三四〇

十八 羊毛

羊毛の原毛(春剪及秋剪)としての總産出は一七、六〇〇吨である。このうち現地で消費されるもの約七、六〇〇吨、貿易用品『過剩』約一萬吨である。

洗羊毛の總産出は——約二五〇吨、その輸出毛量は——五〇吨である。山羊毛の産出は、原毛の總額——一、九〇〇吨、洗山羊毛——九〇吨、不洗山羊毛——約五七〇吨。駱駝毛の總産出は——三七五吨。

新疆に於て收穫される羊毛は、羊種に依つて、次の如き種類に分かたれる。即ち遊牧民春産毛(チニバガ)、蒙古毛種、コートン毛種、クチャール毛種、カルガルイク毛種、マラルバシン毛種等である。半粗毛たるコートン毛種以外の總ての他の毛種は、粗毛種に屬する。

チニバガ毛種、蒙古毛種の色の比率は同一であつて、白——五〇%、帶色——四〇%、黒——一〇%である。熱湯洗毛による減量は二五%以内である。蒙古毛種の性質は、遊牧民毛種より優等である。柔軟、繊細、絹絲やうのコートン羊毛に在つては、色の比率は——白七〇%、帶色——二〇%、黒——一〇%である。北部及北西部地方の羊毛(更に

粗毛にして、性質上蒙古毛種に近いに在つては、白——五五%、帶色——三五%、黒——一〇%である。加熱洗上による減量は——二三%である。

カルガイク種羊毛の特徴は、コートン羊毛に近い半粗毛四〇%の混入してゐるこゝである。色の比率は、白——六〇%、黒——一〇%、赤い茸毛——一五%、灰色——一五%、加熱洗上による減量——二〇%である。

山羊毛に在つては、灰色及黄色（七〇%まで）が優位を占めてゐる。新疆産の山羊の柔毛は、イラン産のそれに比してより細く、より色澤あり且つ原毛よりの收得率が高い點に於て上位にある。山羊の柔毛は、洗上しない。放牧駱駝毛は二種あつて、其の蒙古種は一等品毛三五%、藍一〇%を有し、キルギズ種は一等品毛一五——二〇%、藍——一五%を有する。駱駝毛の色には、白、褐、淡黄、淡褐、深褐等がある。役用駱駝毛の品質は遊牧駱駝毛に比して著しく粗悪であり且つ柔毛（タイラク）を缺く。

十九 山羊皮、羊皮、仔羊皮、仔山羊皮

生羊皮の産出總額は、二百二〇萬——二百六〇萬枚、山羊皮のそれは、三五萬——四〇萬枚、仔羊皮と仔山羊皮の總産出額は、約二〇萬枚である。新疆の羊皮類は、草原産、山地産及肉肆産に分たれるが、其の屠殺法が不適當拙劣であるのこ保存法に缺陷がある爲概して品質低級である。伊犁地方に於ては、肉肆産羊皮が草原産以上に上り且つ品質に於ても優り、クングス地方産、テクス地方産のものは殊に優良である。最低級品は阿爾泰及タルバガタイから出る草原産のものである。伊犁産の羊皮は、鞣用五〇%、毛皮外套用三〇%、クルガシカ二〇%の割である。山羊皮は、大皮四五%、中毛皮一五%、ラーカー一〇%である。羊皮の百個斤量には種々あり、一六〇乃至二百四〇疋の間を上下してゐる。山地産羊皮は若干大形にして重く、百個斤量は、一六〇乃至二五〇疋である。南新疆の羊皮は、大部

分肉肆の屠切であつて、百個斤量一二八乃至二四〇疋である。コートン種の羊皮は幾分高價で百個斤量、一二八乃至一九二疋である。

二十 大皮 革

生の大皮革（仔牛皮、成牛皮）の總産出額は一七萬枚である。このうち家庭工業と手工藝に對する生皮革の需要多大なるため、輸出貿易に供されるものは、二萬五千枚を出でない。馬皮の總産出は、約四萬に上るが同上の理由で、輸出品は、その二五%を越えない。

二十一 腸及其他の畜産品

屠羊に依る腸の總收穫は、二百萬本を越える。このうち輸出品は、保存の不良甚しいため、約五〇%に止まる。角と蹄は、指物用膠に再製される極めて僅少の數量を除いては、全然利用されてゐない。

二十二 養蠶業

十九世紀末まで新疆南部に盛に行はれた養蠶業は、桑樹が廣く繁茂するに拘らず、現今は極度に衰退してゐる。新業の主要中心地は、コートン、チュルチン、ヤルケンド及カルガイク等の諸オアシスである。アクス、クチャール、並にルクチンの諸オアシス（土魯番地方）の住民も、小規模乍ら養蠶業に従事してゐる。一九三〇年以降伊犁地方に於て養蠶業獎勵が企圖され、これがため、ソ聯邦より新疆に蠶種と桑實の輸入を見るに至つた。南新疆に於ける養蠶業は、中央亞細亞のソウエート諸共和國よりする輸入蠶種に依存し、その年輸入高は約六萬兩に達する。この

他蠶種は印度から約八千函輸入され、本地方に於て約一萬框を産する。養蠶業の發達助勢の目的を以て、和蘭の地方官憲は一九三〇年同地に蠶糸學校を興し、蠶兒の飼育、製絲並に絹織を教へてゐる。

絹產品の總額は、最小限に見て、生絹——約二七〇吨、絹屑（サルナク及バシウチ（譯註：共に土語、不詳））——約一四〇吨である。生絹は、繭質の低劣と解繭の不良のため可成り粗悪である。生絹の輸出先きは、ソ聯邦、印度及アフガニスタンである。

二十三 毛皮業

新疆の毛皮富源は可成り豊富なるに拘らず、毛皮業は國民經濟部門としては全く組織を缺いてゐる。狩獵に従事する者は専らコザック、キルギズ及蒙古人で、彼等は狩獵上何等季節を認めず、銃、良以外に毒藥等をも使用してゐる。時には、鷹狩、鷲（犬鷲）狩及犬狩も行はれる。毛皮業者の亂獵の結果、市場に出る毛皮産額は逐年減少してゐる。蒙古人は、最も狩獵に卓れ、狙撃的確、剥皮ミ皮の保存にも、他の狩獵業者等に比して著しく長じてゐる。特殊獸（例へばモルモット）に對する季節的或は一時的禁獵に關する新疆政府の布告の如きも、狩獵に關する相當の行政監督がないため實際上行はれて居ない。

新疆産の主要毛皮類は、狐、狼、モルモット、貂、鼠、熊、野鹿、山猫、栗鼠、貓、*Арыс* 及 *Курк* の毛皮ミ皮である。多少は *Емпе* (約の一種學名 *Felis Pardus*) 豹、虎、黑貂、*Голубая* 黄鼬の皮も見られる。狐はアルタイ、カザクスタン、セミレチニンスク及中央亞細亞系統の種類に屬し、到る處に蕃殖してゐる。狐の最も普遍してゐる種類は、十字狐、赤狐、スナ狐及平原地種の小狐である。山中には稀に黒褐色狐が棲む。最も優れた狐毛皮は、アルタイ産、ウルムチ産及ユルドズ産のものである。狼は所在に蕃殖する。阿爾泰山、天山及蘆葦の繁茂地には、普通の灰

色狼以外に稀に全黒色の狼を見ることがある。アルタイには淡褐色熊、ウルムチ附近には褐色熊を、約はロブノール湖、タリム河及シーホ地方の蘆葦中に見られる。また右の地方には虎が棲息し、其の毛皮ミ屍體は非常に高價を喚ぶものであつて、屍の各部は支那人が之を呪符に用ひ、又藥用に供するが、特にその狩獵を行ふことは極めて稀である。山地には雪豹を見ることがある。山猫は種々の毛並を有するものが到る處に棲息する。極めて稀有の動物である、アナグマ（學名 *Gulo borealis*）は支那アルタイの北部地方にのみ棲むのである。草原地種及蘆葦地種に屬する野猫は、伊犁及カラシャール地方に最も多い。貓は到る處殊にチイの蕃生する地方に棲むのである。伊犁地方の貓はその最も優良種とされてゐる。川獺は、天山中の湖水及タリム河の潟湖に蕃殖する。貂（森貂及頸白貂）は黒貂及黄鼬同様の極度の亂獲のため、新疆に於ては、今日は既に珍獸に屬する。西比利産に比してより淡色で値の劣る黒貂が只支那アルタイに蕃殖する。天山には極めて稀れであるが、褐黒色の非常に高價な毛皮の貂を見ることがある。新疆の黄鼬は全白では無く、胴の背部に黄色の陰影ある毛皮を有する。準噶爾地方に於ては中央亞細亞及蒙古系の淡色臭猫が普通に見られるが、黒色のものは稀れである。鼯鼠は到る處に蕃殖してゐる。サルイコル山及バミル高原地方に於ては、山々羊が蕃殖してゐる。南部新疆は、毛皮獸の種類に於ても、採收する毛皮の一般的性質に於ても、ずつと貧弱である。

新疆貿易毛皮商品の首位を占める毛皮獸は最も普遍するモルモット（學名 *Arctomys bobac*）である。平草原地産のモルモットは、カザクスタン系及蒙古系のモルモットに類似する。高山草地産のモルモットは、アルタイ系、フェルガン系及中央亞細亞系に屬する。草原産モルモットは主として、支那アルタイの平草原地に蕃殖してゐる。山モルモットは、アルタイ山、ヂンガルのアラタウ山、南山及天山（アトバシ種）の山中に蕃殖してゐる。モルモットの最も豊富な蕃殖地帯は、伊犁及カラシャール間の山脈である。モルモット毛皮の等級は種々である。生毛皮業者の統計的數字に

依り、毛皮の等級別百分比を見るに一等品——二〇%、二等品——三七%、三等品——二七%、四等品——一六%である。毛皮の寸法による等級の百分比は、大モルモット——五〇%、中モルモット(コテリ)——二二%、小モルモット(メンデリ)——二八%である。捕殺季節別では、秋モルモット——六五%、春モルモット——三五%である。

二十四 林 業

新疆に於て豊富な森林を持つ地方は支那アルタイ地方、天山斜地及伊犁區のみである。山斜地を覆ふアルタイ森林は主として針葉樹——テウセンアカマツ、タウヒ、アカマツ、モミ——で、良建築材を供給する。黒イルチシ河の沿流及アルチム河、ベレゼク河、アルカベク河の沿岸には、主として、ドロノキ、白樺、テウセンヤマナラシ等の樹種より成る闊葉樹林が続いてゐる。伊犁區に於て、最も森林に富み且つ最良の樹種を有する地帯は、クングス河谷で、次ぎは、テクス河々谷地方及カザンチ山、アクウーゼン山、サルイブラーク山、ケンデレンスウ山、タルキ山、ダシグール山及シヤシグール山並にバラタリン地方のアラタウ山を被覆する森林である。最も普遍してゐる林樹は、タウヒ屬であつて、その他はドロノキ、テウセンヤマナラシ、ニレ、楊柳である。野生果樹としては、林檎、クルミ、デッド(譯註「土語不詳」)の如きものがある。新疆の沙漠には、サクサウルが生え、山には杜松(學名 *Juniperus Communis*) 其他の叢林がある。タリム河流域の若干地方には、幼樹林を見るこゝが出来る。

森林は官有地になつてゐるが、何等の經營も行はれてゐない。森林の掠奪的利用は多くの地方(例へばタルキン狭谷地)を既に無林地化してゐる。森林の採伐は、専ら省内の需要充足のために行はれてゐる。支那アルタイ伊犁地方の森林採伐には、それ等地方の流筏河川が利用されてゐる。森林面積は、調査されてない。

二十五 漁 業

新疆には、發達した經濟部門としての漁業は存在せない。ただ塔里木河域、ロブリノール湖及支那アルタイ伊犁地方の水系に蕃殖する魚類の平凡な漁撈が行はれてゐる。黒イルチシの山地支流には、イシモチ (*Salmo thumalli*)、カハシ (*Gadus lota*)、イダ (*Idus melanotus*)、ウスタチ (*Salmo lenoo*) 及「タリメン」のいふ斤量三〇斤にも及ぶもの等が蕃殖してゐる。カマス、フナ、ボラ及スズキ等の魚族は、支那アルタイの全水系に蕃殖してゐる。ウリユングルのスズキに至ては、其の大なる驚くべきものである。ウリユングル湖に至るまでの黒イルチシ河流域には、鱒魚類(「アセトル」、「ステルリヤチ」等)に屬する赤魚が蕃殖し、アルチムカバ間には、サケ (*Salmo Nelma*) がゐる伊犁區の諸河川には、單に小魚(鯉「マリムカ」) (學名 *Barbus fuirtilis*) のみ蕃殖してゐる。

第六章 工業及手工業

一 概 説

新疆が植民地状態にあることは、其の生産力を低水準に止まるの已なきに至らしめてゐる。

現地の原料を加工する各種部門を網羅する家内工業と小手工業生産、これが新疆工業の基調である、而してその各種類例へばマータ（一種の棉布）、毡氈、絹織物の製織の如く生産原料の現存及他の経済的ファクターが、其の集中化を有利にする一定地方にあつまつてゐる。

新疆の小生産者は商業・高利貸資本に羈縛せられて居る。彼等は主として、商人の注文により且つその原料によつて仕事をしてゐる。

新疆の小商品生産に在つては、多く家族と共に働く單獨手工業者及雇傭勞力と徒弟の無賃勞働を用ふる小業者組合が大多数を占めてゐる。この他資本主義的マヌファクチュア型の産業企業が若干存する。以上の諸形態の企業は、其の生産に原始的の手工技術を用ひ、場合により、動物及天然動力資源（水、風）の動力を利用してゐる。汽力及發電機を有する機械的装置は、工場製造所型の若干の企業に於て之を見るのみである。

一部大規模の工場は、官營企業になつてゐる。これ等の工場は「模範工場及徒弟養成所」の形に於て經營されてゐる。官營工場の各々には、官吏の監督下に、二〇乃至五〇人の職工と徒弟が従業してゐる。これ等の官營企業は、ウルムチ、トルファン、ビチャン、クチャール、カシガル、アクス等新疆の諸都市に存在する。其處に於て製作せらるるものは、主として履物、鞍、軍需品並に綿布、毛織物等である。これ等の生産品は市場に出でず、専ら軍衛、行政府に供給されてゐる。

二 天然富源及採鑛業

新疆は有用鑛物に富んでゐるが、その採鑛業は小私營企業が手工業的方法を以て、若干種の採鑛を行つてゐる程度に過ぎない。政府の採鑛事業としては金、軟玉の採掘及一部炭鑛に於ける採炭を見るのみである。一九三〇年迪化政府の立てた經濟計劃には輸入機械装置に依つて鑛山富源を採掘する目的を以て堅坑構設の案を有してゐるが、この計畫は、實現に至らず只若干の有用鑛物に就いて豫備的地表採鑛に終つた。寶石、金、銀、軟玉等を除いては鑛産物の輸出は行はれてゐない。

(一) 金

支那アルタイと和闐區とは、金鑛地區に富んでゐる。支那アルタイに於ける砂金及自然金鑛の所在地は、トイト、ダム、クウールチイス、バラールチイス、クンチテ、シヤラスメ附近、クラン河々畔等である。金鑛の或るものは金含有量が鑛一匙半につき三ゾロトニク（一ゾロトニク四・二六六瓦）に達してゐる。最近政府は、採金の合理化を企圖したが未だに本事業は、専ら原始的の洗淨方法によつて居る。年採金高は、四〇〇匁である。和闐地方に於ては、ケリヤのオアシス及和闐市附近に於て採掘されてゐる。チュダチャグの北方、ソウート國境附近並に伊犁地方のチャルガラン河流域に於ては、金が白金と一處にあることが發見された。この地方に於て、一九二二年試験的に行はれた洗鑛では、三五立方尺の容積の原鑛から金約八ゾロトニクを得た。

シホ縣クイト。ク河畔及チンIIヘー地方に於ても金礦が発見された。私營的に採掘される金は、限定價格で國庫に引渡さなければならぬことになつてゐる。

(二) 銀、鉛、亞鉛

銀II鉛礦及鉛II亞鉛礦の採掘は、タルバガタイ山、天山並庫車附近及和闐地方、サイドル縣に於て盛に行はれてゐる。而して鉛礦はタルキン峽谷中に夥しく存する。

(三) 貴石及半貴石

貴石及半貴石は主として天山々脈の南支脈に産する。淡色ルビー、紫石英は和闐縣に於て採掘される。また和闐縣には透明石膏、灰色碧玉、紫色花崗石の鑛層がある。これ等の石は、地方の支那人が、之を印材や各種裝飾品並に小食器等に製作する。テクス山に於ては、白色、煙色、薔薇色の黃玉、水晶、瑪瑙、花崗石、透明石膏、天青石、碧玉、軟玉が発見された。軟玉は和闐縣に於ては、政府が採掘して支那に輸出してゐる。綠閃石、金剛石は支那アルタイのチンギリ地方に産する。

(四) 鐵

鐵礦は、天山の支脈に産し、その鑛脈は磁鐵、半マルチットから成る。バラタリン地方のボロホロ山には、極めて屢々クロム、ニッケルを含有する褐色及泥石色の鐵礦が発見される。而して鐵礦は又タルバガタイミアルタイの山中に発見されてゐる。

(五) 銅

銅礦は、和闐區のサイドル縣に発見された。黃銅礦、赤銅礦の大鑛脈は、伊黎區中、殊にヂュイIIスウミムウIIスウに於て有名であつて、其處には、廢坑や古い支那鑛銅所の遺趾が存してゐる。銅山はなほ、タルバガタイ山、支那アルタイに存する。

(六) 石 炭

コークス用炭より無煙炭に至るまでの各種の石炭層は、アルタイ、シヤラスメ附近、ウリユングル湖地方、サウル、チアシカIIブラクのチメルゲン河地方、バラバゴイ及ノガイトイ等新疆の多數地方に存在する。古くから知られたウルカシャール山に於ける炭層以外に、タルバガタイには、チユグチャグの南東タストの沙漠地方に、最近新しく炭層が発見せられた。南山南方斜地のシホ附近、ウルムチミナスの近傍並に哈密及バルクラーリ附近には何れも大炭層が横つてゐる。東トルキスンに於ては、アクス、クチャール地方及ケリヤに炭層が在る。最も豊富な石炭産地はクリチャ地方であつて、炭層は、ボロタール河畔、ヂュンガールのアラタウ山南斜地、伊黎河々谷(ガングル及チジャンの炭層)に散在し、伊黎河々谷には最も廣大な炭層が在る。之に亞いでカシ河々畔、テクス河流域、ホロゴス附近(チンパンズ)に石炭を産出する。クリチャ流域の石炭埋藏量は、最小限二億六千萬噸である。

石炭の採掘は、僅小に止まり、手工業的企業、地方民の燃料需要を充足するのみで、採掘地方外には、移出されてゐない。炭坑の設備は、甚しく原始的であつて、坑の崩潰、爆發を見ること屢々である。坑夫の勞働状態は、牢獄的である。

(七) 石油

最主要の油田は、ウルムチ及マナス地方に存在する。なほクチャール附近ミカシガール地方に石油の産地が在る。又石油の産地は、アルタイのウリユンダール湖附近にも発見された。ウルムチの油田は、その油量の豊富なことに於てバクラーの油坑に劣らない。石油の採掘は、手工業的の極めて原始的方法によつて行はれてゐる。原油の燈油再製法は同様に幼稚で、その再製量も僅少であり質も極めて低劣である。

(八) 其他の鑛産

叙上の主要鑛産物以外、新疆の諸地には、硫黄、明礬、硝石、石棉、鹽化アムモニヤ、滿俺、雪花石膏、赭土、石灰の鑛山がある。このうちで重要なものは採鑛業であるが、鹽は新疆政府の專賣となつてゐる。最大鹽鑛は、クリヂヤルウルムチ街道に在るダヘヤンズのそれである。カシガルミアクス間には、新疆の全南部に供給する鹽鑛がある。尙ウリユンダール湖附近に厚大な鹽層が在る。

二 加工々業

(一) 纖維工業

新疆には、マータ織、チクメン織等の手工業的棉糸紡績業が、極めて廣く發達してゐる。これ等織物生産の主要中心地は、ファザバド、ヤルケンド、ヤンギギサル等の南部新疆地方である。手工業的工場に於ける製布額は、年々

五百三〇萬反、一反を平均五・六米にして、二千七百萬米以上に達する。このうち六〇萬反以上は、甘肅ミ西藏に、約二〇萬反は、アフガニスタンミ印度に輸出される。現地消費額は、約四百五〇萬即ち二千五百萬米であるが、之は全新疆民綿織の平均年需要額の三分一に當つてゐる。

之に亞ぐ紡績業は、和闐及迪化地方に於て矢張り手工業的方法に依つて地方絹糸を織る絹布で、其生産額約六萬反である。

ホウミン株式會社が、政府の出資を得て一九二八年迪化に設けた新疆唯一の機械裝置紡績工場は、七二〇錠の三紡績部ミ二六臺の機械を有する七製糸部ミを有し、棉絲、棉布を生産して居る。最近の生産高は極めて小額に止まり、毎月の生産高布六〇〇反、同絲二〇擔に過ぎなかつた。但し最近數年本工場は休業してゐる。

纖維工業の附帶的企業としては、マータ布、チクメン布の染色がある。染色は印度を経由して、主に獨逸から輸入される藍染料及現地産植物染料によつてゐる。

(二) 皮革工業

手工業の部類に屬するものに生皮の加工(羊生皮、牛馬生皮の加工)次に半商品の加工(靴の底皮、靴類用皮、上牛皮)及諸手工品(長靴、スリッパ、靴、馬具品、羊皮シューバ、半シューバ)の製造業がある。如上の諸部類の手工業工場は伊犁地方、南新疆諸區及支那アルタイに最も多い。伊犁の諸工場には蒸汽發動機、發電機を裝備したものがあつた。伊犁の商人ムサバエフの工場は、一二〇馬力のディーゼル機關ミ七五馬力のモーターを設備して居る。年生産力は、羊皮一〇萬枚、牛馬皮四萬である。然し本工場は、其能力の二五%を働かせてゐるに過ぎない。労働者數は一八〇乃至一〇〇人である。機械力に依らない皮革工場に、同じく伊犁地方のサドレツヂノフ兄弟の工場がある。この製

革工場は水力動力を利用し、セメント製灰槽及生皮加工用の鼓輪を装備してゐる。其生産能力は、牛馬皮二萬枚、重山羊皮一萬である。労働者数は、六〇乃至八〇人である。伊犁區内には、なほ同様形態の三つの小製革工場があるが其一は、外人(獨逸人)に屬してゐるもので、目下繰業して居らない。その各工場の年生産能力は、大小原料皮二萬乃至二萬五千枚である。前記ムサバエフの工場には別に幼稚な設備を有する附屬の工場があり、労働者二五人によつて靴及馬具を作つてゐる。而して此種の手工場は、全新疆に散在してゐる。牛馬皮及羊皮以外、他の製革工業品は省城内の需要品たるに止つて外國市場に出づることは無い。

(三) 獸毛加工々業

獸毛加工々業として洗上、乾燥及選毛即ち洗毛企業ミフェルト製品(コシム(薄フェルト)、フェルト、毛製袋)及毛長靴、パイバーク(靴下)、包屋用裝飾、輪索等を製作する手工業的工場並に絨氈製造企業等がある。最上の絨氈には、彼の和國産の輸出絨氈の如きもあるが、これ等は、遊牧民の家内工業に於て生産される。而して小席、牛馬の捕繩も同じく彼等の家内工業によつて作られる。絨氈の生産は主としてカシガルミ葉爾卷(絨氈)及和國ミロブ(半絹絨氈)に集中してゐる。

(四) 繰 棉

新疆には、土魯番、クルルル、及喀什噶爾に繰棉工場がある。喀什噶爾商人アファンバーエフの一工場は閉鎖されてゐるが、別の一工場がソ聯邦輸出の棉花繰上をしてゐる。住民の家内の消費並に手工業的紡糸工場用棉糸に對する需要は、原始的手業繰棉法を以て充足されてゐる。

(五) 食 料 工 業

新疆の食料工業は、各種の手工業的の食料原料粗加工であつて、工場形態のものには存在せない。現下迪化ミ伊犁には、機械化された製粉所ミ油房ミが創設されてゐる。既存の油房、精米所、製粉所、挽割黍製造所は農民の自家用のものは云ふまでもなく、何れも大方は、勞力、畜力、並に水車、風車に依つて動く原始の手製装置の手工業的形態の企業である。新疆に散在するこれ等企業の統計的調査はない。

(六) 其他の工業部門

食料工業の副業的部門として、なほ主として動物の廢物原料を用ふる再製企業がある。之に屬するものに、普通石鹼、獸脂蠟燭、膠等の手工的形態の製造所がある。伊犁並に迪化地方には、地方的需要に應ずるため、米、高粱、小麥、玉蜀黍を原料として火酒(ヂェン)を製する原始的装置の酒釀造所が若干ある。また家内の製法を以て、稷から一種の酒様の飲料「ブーザ」が造られてゐる。伊犁には、手工業的に行つてゐる現地産煙草の加工企業が若干ある。また一煙草製造所は、煙草刻切器、卷紙製作機及卷紙填寫器を装備して、中級品以下の紙卷煙草の製造に従事してゐる。

林業及製材工業は、主として、森林の豊富な伊犁區及支那アルタイに集中してゐる。木材の伐採ミ、これが加工は機械化鋸を缺くため、手力によつてゐる。木工業としては、新疆の各市各村に在る指物大工々場のそのみである。新疆の都市農村には鋸冶及鐵工ミ鐵力工場並に熔銅工場の形態に於て、手工業的の金屬加工々業があつて、各種の金屬製品及什器類の製造を行つてゐる。建築用材料の生産には木材加工の他、手工業的の煉瓦製造がある。

第七章 運送及交通

一 通路

封建・隸農體制下に在る新疆の全國民經濟に於て特徴的な極度の時代遅れと沈滞状態とは、其道路經營にも顯着な反映を示して、道路は極めて低い發達水準に在る。南部新疆にしても、北部新疆にしても、道路の大部分は自然的道路である。これ等の道路の或るものは地貌上、土壤條件上、車輛の通行にも又若干の困難は伴ふが貨物自動車通行にも堪へる。

荷駄道路、古驛遞路並に車道は極めて局部的であつて、新疆の宏大な面積に相應して居ない。便利で安價な水運を組織する可能性のある西部支那の若干河川も今日まで未だ利用せられてゐない。

二 交通路の方向

新疆の南部及北部に於ける基本的驛遞路の方向は、一種の特異性を有する。南部新疆の國內道路は各地オアシスを連絡する方向に走つてゐる。而して對外的意義を有する通路は、地方經濟の中心點としてのこれら諸オアシスから南疆を環ぐる山脈に向ひ、西藏、印度、アフガニスタン、ソ聯邦等と南疆を繼いでゐる。南疆は支那本土とは戈壁沙漠を経て連絡してゐる。北部新疆と南部新疆とは、ムザルト峠を越えて、テケス河谷に出ずる山路に依る以外に、貿易・行政の中心たる諸オアシスを経て、迪化方向に通ずる車道に依つて連絡してゐる。北部新疆道路の始發點

は地方的諸都市であつて、幹線的外國貿易路も、岐路の妙い内部的地方的連絡路もこれ等の地點から出てゐる。

三 北部新疆の交通路

北部新疆の幹線道路は、南北新疆を東部支那及蒙古と聯絡する諸道の衝點に横はる新疆の行政中心地たる迪化より發して居る。即ち

(一) ウルムチ——マナス(一三八杆)——シホ(二四八杆)——チングチャグ(三四八杆)——バフトイ(一八杆)
 總里程——六五二杆

(二) ウルムチ——マナス——シホ(二八六杆)——ジンヘー(一五七杆)——スイド。ン(二三五杆)——クローリヂヤ
 (四・五杆)——ホルゴス(一〇一杆)

總里程——八二四杆
 (三) ウルムチ——マナス——シャワン——ブルチューム(五四四杆)——シャラスメ(一六二杆)——ザイサン(三五六杆)

總里程——九七二杆
 (四) ウルムチ——ハミ間六七三杆及七六八杆(二路線)

右のうちウルムチ——チングチャグ道路は迪化と塔城の中心地方を結び、國境地點バフトイを経て、カザック自治共和國に直通する古い荷駄道路である。而して右バフトイからはトルクシブ鐵道驛たるアヤグズ(セルギオポリ)に向つて、ソ聯邦とウルムチを連絡する最捷路となつてゐる自動車路(二九八杆)が通じてゐる。

支那アルタイの主要道路は、ウルムチ—シヤラスメ間幹線（シヤワン—ブルチュームを経て）以外に、この地方ミタルバガタイを結合する道路たるシヤラスメ—ブルンイトホイ—ウリユンダ湖—コブク河谷—ド。ルブルヂング—チユチャーク（全長七〇一杆）の線である。シヤラスメからブルンイトホイまで一二四杆である。シヤラスメからソ聯邦方面にかけては、ブルチュム—マイコブチガイを経てザイサンに至る車道が通じてゐる。ザイサンからトルクシブ鐵道の最近驛ヂヤンギズルチユベまでは、コクベクトイを経て、自動車輸送に適する道路（全長三九〇杆）が通じて居る。

外蒙古共和國ミシヤラスメは、科布多に至る道路（三五八杆）を以て連絡される。叙上シヤラスメ地方の諸道路は何れも荷駄車道である。

ウルムチミクリヂヤ間には、シーホからジンヘーサンタイトルキン峠を経て、スイドゥンに通ずる幹線道路以外になほ郵便路から外れて、ボロホロ山脈の鞍部を通ずる自然的の家畜道たる荷駄路によつて、シーホ—クリヂヤに出す二つの捷路が在る。貨物輸送には相當困難を見るこの捷路の距離は一は六三四杆、他は六九〇杆である。

クリヂヤ郵便路は、ウルムチ—チ。グチャク通路と同様、其の自然状態上、輕量の自動車輸送に適する（但し冬期を除く）。ソ聯邦ミウルムチの商業的聯絡からいへば、クリヂヤ通路は、チユグチャグ通路より長距離且つ不便なため今日に於ては意義を有せない。内國的交通關係に於ては、ウルムチ—クリヂヤ郵便路は地方的の行政經濟的意義を有する。この通路のソ聯邦方面への延長は、スイドゥン—クレーエ—チンバンズイを經由するクリヂヤ—ホルゴス間荷駄路である。ホルゴスミトルクシブ鐵道最近驛サルイ—オゼク間（二二〇杆）は自動車を通ずる。ジンヘー經由クリヂヤミチユグチャグを聯絡する内國的意義の自然的荷駄路の全長は五三六杆である。

アクスからクリヂヤに至る道路は、極めて險難なムザルト峠を通じてテケス河々谷に出て居る。アクスからこの河谷の中に在るムザルト哨所に達する通路は全長二五杆、僅かに荷駄輸送に適す。

四 北部新疆から東部支那に至る通路

迪化から東部支那に至る通路には、哈密に達する二幹線路がある。一は庫車を経、次いでバルクル地方を經由する道路である。この道路即ちウルムチ—フーカン—庫車—バルクリ—哈密の全里程は七六八杆である。第二は、ウルムチ—トルファン—オアシス—ビーチャン—哈密の線である。庫車—哈密の兩市は、新疆ミ東部支那を結ぶ交通路の中心であつて、その主要路を擧げるに先づ内蒙古の草原を通ずる『大草地路？』がある。之は庫車から一路包頭即ち北平—綏遠鐵道の最終驛に達し、そこから鐵道に沿ひ、張家口—天津に出て居る。この自然道路は、單に駱駝に踏み固められて生じたもので、延長二、三四〇杆、隊商の行進速度の如何に因つて七〇—一二〇日を要する。この道路は、牧畜條件によつては、駱駝輸送上最大の便利路である。加之他の基本幹線路即ち『小草地路』よりも短距離である。小草地路は、甘肅省を通過するもので、戈壁沙漠を経て、チユルチン—ククリヤ—和闐に通ずる『小皇帝路』に對し、従前『大皇帝路』と稱へられた蘭州—肅州—哈密の區域にわたつて、郵便車道に沿ふて居る。肅州から庫車に向ふ前記道路は、二方向に分岐し、その一は延長二、五九〇杆、他は二、七四〇杆である。この兩幹線路には八〇乃至九〇の隊商驛が在り、季節による道路の状態及駱駝の行進速度に應じて、八〇乃至一五〇日を要する。駱駝の輸送には、郵便（至急便）ミ普通便とあつて、前者の高運賃なるに反し、後者は殆どその半額の低運賃である。

五 南部新疆の通路

タクラマカン沙漠ミ南部新疆を繞る連峰の間の諸オアシス中心地を通づる南部新疆の基本的幹線路は、喀什噶爾、

和蘭を迪化に結ぶ荷駄車道であつて、それは次の如き進路を取る。即ち

ホータン——カルガルイク——ヤルケンド——マラルバシ——アクス——クーチヤル——クルリ——カラシヤール——トクスン——ウルムチ

この總延長二、〇〇五杆である。和蘭の反對側に向つて、ケリヤ——チュルチェン及戈壁沙漠を経て甘肅に入る荷駄車道があるが、これは甘肅省に於て『小草地驛遞道』に合する。南部新疆からソ聯邦に至る道路は、カシガル市を始發點として二つの幹線路がある。一はカシガル——イルケシタム（國境點）間の荷駄路で、延長二二三杆、他はカシガル——トルグルト峠間の車道で、延長一七五杆である。イルケシタムからは、スファイクルガン——ドリチア經由オシ驛に至る自動車輸送用として修築されてゐる荷駄路が通じてゐる。アクスからはウチファンを経て、ペデリ峠を越え、カラコルに向ふ荷駄路が通じてゐる。

六 印度、アフガニスタンへの通路

南部新疆から印度に通ずる基本荷駄路は、ヤルケンド——カルガルイクからカラコルム峠を越え、印度のラダクに至る所謂レフ通路である。この通路は、ラダクからレフ——スリナガル（車道）幹線に沿ひ、カシミル——ラワリピンチ鐵道の最近驛に達する。この通路の各地区間距離は次の如くである。即ちカシガル——ヤルケンド——カルガルイク——レフは冬季に於て九六六杆、夏季に於て一、〇〇二杆、レフからスリナガルまで四五〇杆、スリナガルからカルルイクを経て和蘭までの距離は、カシガルに至る略ぼ同じである。新疆と印度を結ぶ他の東通路は、サルイコール——ワハンを経て、ギリギト——チトラール方向に出でゐる。この通路の分岐してキリク峠、ミンテケ及ボロギリを通ずるものは、レフ通路よりも非常に便利であるが、英國が取引輸送を阻害してゐるため、通商路とはなつてゐない。

カシガルからタシクルガン——ミンテケ峠を経てギリギトに至る距離は、五六〇杆である。而してギリギトからスリナガルまで三八〇杆、總計九四〇杆である。更にカシガルからタシクルガン——ボロギリ峠——フズウ——ギリギトを経てスリナガルに至る通路があるが、その延長一、二二〇杆である。アフガニスタンとの通商は、サルイコール——ワハンを経て行はれる。

七 自動車輸送

自動車輸送の最初の企圖は、一九二七年のこに屬し、當時新疆政府は約五〇臺の新古自動車を購入し、チュダチヤクミハミ間のウルムチ路を自動車輸送用路に改修する計案を立てた。これがためマナス河の橋梁架設に着手し、一九三一年に其の竣功を見た。そして一九三〇年には、ウルムチに自動車の運轉手及技術者養成所を開設し且つ道路局を置き、新疆の幹線道路を自動車輸送用に改修する案を立てた。第一に迪化——奇台間地區（二五四杆）に自動車路の開通に着手し、一九三〇年末には、之を使用に供した。翌年の初には、奇台——哈密間（五一四杆）の荷駄車道の鋪裝化に着手した。然しその開始事業は哈密地方に勃發した叛亂のため中絶して了つた。

一九三三年に生じた新疆新政府は、迪化——塔城間の道路踏査を開始した。

八 自動車探險隊

最近年間新聯には、新疆と東部支那間に不斷の自動車輸送聯絡を設定するを目的として、數度の自動車探險隊が組織された。之に對する第一次の試みは、張家口より迪化に至る自動車コースであつて、それは一九二四年當時所謂

「スウェーデン探検隊」即ち舊露清銀行の白系亡命露人探検隊によつて行はれた。其後東部支那よりスウェーデン・ヘチンの瑞、獨探險隊が自動車をもつてウルムチに到着した。一九三六—二七年には米人レチモアが、歸化城を發して、オールドス——阿拉善を経て、奇台に達する旅行を果した。其走行里程は、一、五八七哩であつた。一九三〇年十二月には、瑞典人ソデルボムが張家口から十三日間の自動車乗行を以て、哈密——吐魯蕃經由到着した。一九三一年の中頃にはソデルボムの跡を通つて、佛蘭西シトロン自動車會社の組織した佛・支探險隊「黃色隊商」が、特殊のカッターピラーに乗つて迪化に來た。この探險隊は歸化城を發した東部隊とシリア發チリギットを指し、イラン、アフガニスタン、西北印度を經南部新疆に出でた西部隊より成つてゐた。如上の探險隊の事業は一九三三年の兵亂によつて中絶した。

九 航空連絡

新疆東部支那間の交通改善の企圖は、航空路線の上にも企てられた。一九三〇年、當時南京政府交通部所管の歐亞公司の支店は、左記の定時航空路の組織を圖つた。即ち

太原——綏遠——包頭——魚海——哈密——迪化
 鄭州——西安——平涼——蘭州——甘州——安西——哈密——迪化——伊黎
 會社の飛行機は、一九三一年末に、北平より迪化に試航した。然しこの空路の定期航行はまだ設けられない。

十 水 運

支那アルタイ及伊黎地方の水系は、航運上には極めて限定された、若干の用をなしてゐるのみである。支那アルタ

イ地域に於て航行し得るものは、黒イルチン、アルチューム及クラン等の河川である。

一九一三年露國技師モシコフの特別探險隊によつて汽船の試験航行が行はれ、アルカベック河口からウリユンダ湖に至るまでの黒イルチン河の可航性が確められた。然しそれは五月——六月の期間のみであつた。

支那アルタイ河川の航運利用に關する問題の解決には自然的航行條件を豫め徹底的に研究しなければならぬ。

伊黎地方に於て汽船を通じ得るものは伊黎河である。テケス河ミクングス河は新疆に於て合流して伊黎河となり新疆を貫流すること延長約五〇〇軒である。伊黎河は新疆のクレーエ市からソ聯國境まで(五七軒)吃水〇・九米以下の船を以つてすれば全航行期間中(三月半より十月まで)運航することが出来る。

十一 運 賃

新疆に於ける車載輸送は、馬・牛をつけた支那式及回紇式二輪馬車並に主として國境地方に於て用ひられる露國式荷車を以て行はれる。この種車輛の積載力は、道路の状態その季節的状況及繋駕する牛馬の數に關係すること勿論である。普通に回紇二輪馬車は二八八乃至四〇〇軒の貨物を積載し、支那馬車は九六〇乃至一、二八〇軒、露國式荷車は四〇〇乃至六〇〇軒を積載する。駱駝の標準負擔量は四〇〇軒以内の距離に於ては、一七六——一九二軒、長距離にては一六〇軒である。運送が双峯駱駝によつて行はれる南部新疆の山地路に在つては、駱駝の最大負擔量は夏期一九二軒、冬期(十一月—四月)一二八軒である。馱馬の標準負擔量は、九六——一二八軒、驢馬は四八——六四軒である。

荷駄車輛輸送に於ける貨物輸送費は安定的なものでは無い。それは需要時に於ける輸送資材の有無、道路の季節的状況、道路の長短並に貨幣の爲替關係によつて劇しく變動する。新疆政府は、官荷(穀物、鹽)輸送並に軍事的必

要上、年々輸送資材の強制的動員を行ふ。この運送動員の殊に激甚な場合には、取引運送は或は全然杜絶し或は著しく減少するを常とする。陸運々貨は逐年騰貴してゐる。主要道路について、一六疋單位の荷物運賃は次の如くである。(單位=迪化兩)

通 路	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
自テグチャク至 ウルムチ(一輪車)	三・二〇	四・五〇—六・〇〇	八・〇〇—一・一〇〇	二五・〇〇—〇・三〇	一、一〇〇〇
自テグチャク至 バフ、トイ(露馬車)	〇・二〇	〇・三〇	〇・二〇—〇・五〇	五・〇〇	二〇〇
自テグチャク至 ボルゴス(二輪車)	〇・六六	〇・七五	一・二〇	一〇・〇〇—二二・〇〇	二二〇〇
自テグチャク至 ウルムチ(二輪車)	五・〇〇	七・五〇	一〇・五〇—二二・〇〇	—	一、三〇〇〇
自テグチャク至 テグチャク(二輪車)	四・三〇	六・〇〇	一〇・五〇	三六・〇〇	七〇〇〇
自テグチャク至 アクトス(驢馬又は馬)	二・〇〇	三・〇〇	五・〇〇	—	—

カンガル及イルケシタム間の運賃は、最近三ヶ年間(一九三三年まで)一六疋に對し、二分一乃至四分三サラを下してゐた。チトラール及ワハンに至る一馬の貨銀は三〇乃至三五サラである。前記レフ通路に依るカンガル及スリナガール間一六疋の運賃は七乃至九サラである。レフ通路は年中の六ヶ月間貨物輸送に適するのみであるが、荷載隊商の所要通行期間は約五八日である。新疆より東部支那に至る諸道路の運賃は常に非常の高低を示すが、それは單に輸送條件と道路の季節的状況にのみ關係するのではなく、奇台と哈密に通ずる諸道路による隊商の行進に直接影響す

る政治的事變に左右される爲である。隊商輸送費以外運賃中には、駱駝每頭割通關稅約二墨銀弗、牧畜稅二・五墨銀弗、牧夫稅〇・四墨銀弗、貨物種別稅表に依る内國關稅をも包含する。總じてこれ等の諸附加稅は駱駝每頭當り約一〇墨銀弗に上る。貨物保險を附することになつてゐる至急便隊商輸送にあつては、運賃は殆ど倍加する。新疆から東部支那に至る輸送に際しては、運賃の支拂勘定は、迪化の兩貨幣を以て行はれ、兩墨銀の爲替差額を算入することになつてゐる。新疆から東部支那への隊商出發委員は、十月—十一月であつて歸還は、一月—六月である。駱駝は七月—九月の間、バルクリの牧野に牧養され行進中は途上の牧草を飼料にする。

十二 輸送方法

政府道路局の管轄下に在る自動車輸送以外貨物の輸送は、小私營企業(隊商業者)によつて行はれる。

十三 無電、郵便、電信、電話

郵便局は新疆の總ての都市に存在する。至急便は普通騎馬手によつて送達される。騎乗送達便に依れば喀什噶爾—迪化間一四—一五日喀什噶爾—イルケシタム間二—三日である。迪化と幹線道路に沿ふ區、縣の總ての都市間には電信が通じてゐる。ロシヤ革命前ザクサン、バフ、トイ、イルケシム等の國境地點を經由して露西亞と新疆とを結んでゐた直通電信は今日猶回復されてない。但し伊犁ミホルゴスだけは今日既にその連絡を回復してゐる。電話局は唯迪化にのみ在るが、それも官署専用のものである。迪化、喀什噶爾及奇台には無電局が在り、猶他の諸都市にも設置の計畫である。

第八章 金融財政及借款

一 貨幣制度

新疆の幣制は、混亂を極めてゐる。通貨は統一されてゐない。随つて新疆の貨幣市場は、内部的に分裂してゐる。伊犁地方には、一九〇九年以降、計算基本貨として伊犁帖が發行せられた。伊犁帖を並んで、兩替用小銅貨及種々の代用貨幣（個人商店や賭博宿等の發行する支那文字の刻記、票名のある銅、骨及蘆竹の小棒の形態をした）が流通してゐる。一九二七年（名目換算率）迪化兩の三分の一から新疆政府が開始した伊犁帖のデフレーションは一九三〇年に至つて終つたが、伊犁帖は、其の後も——一九三二年迄——兩の地方的交換小貨として、少量ながら流通してゐた。

新疆の公定單位貨幣は、迪化兩紙幣であるが、この兩紙幣は實際には、單に塔城地方、シャラスメ地方、迪化地方、伊犁地方、哈密地方、カラシャール地方に流通するのみである。喀什噶爾、和闐及阿克蘇地方に於ける通貨の基礎は、地方的單位貨幣即ち喀什噶爾のサラ貨である。兩及サラを並んで銀塊が使用されてゐるが、之は遊牧民及半遊牧民經濟が未だ充分に貨幣經濟の領域に引入られてないため、草原地方及一部定着農民の間に通貨（物々交換に際して、彼等が用ひる現物價值單位たる羊や磚茶以外に）または貯蓄用物件とされてゐるものである。これは銀の鑄貨（蹄形又は小舟形）であつて、普通九二五位銀、九六五位銀、或は九八五位銀のものである。重量によつて三重量兩五重量兩、一二重量兩、二〇重量兩及取引上所謂クレーピン兩と稱され、恰度三七・一八瓦に當る五〇重量兩がある。東支那及印度に對する取引勘定に於ける新疆の支拂はこのヤムプ銀を以て行はれる。

迪化兩（迪化帖即ち官票）は、迪化地域外には流通しない新疆の獨立的貨幣單位である。迪化兩は一〇進法に分れ各錢は（錢は土耳其語では、ムイスカル）、一〇分に分かれる。即ち一兩は一〇〇分に當る。兩替硬貨としては、青銅錢——ダーチャン（ヤルマキイ）があり、五分、二・五分、四分一分となつてゐる。

迪化の紙幣兩は、重量三五・七八瓦の所謂シャンピンランなる重量兩銀貨に名目的に等しい。而して新疆貨幣制度の基準となつてゐるこの銀貨は、新疆道尹によつてそれが紙幣として獨立的に發行されたとき（一九一八年）、迪化兩の支拂能力は形式的に決定された理である。しかし迪化兩紙幣を名目基準貨幣たる銀兩又は銅錢と兩替する場合に於ける紙幣の實際相場は四〇〇ダーチャンであつて公定比率は全く離れてゐる。

迪化兩紙幣が、兩銀貨と平價であつたのは、唯一九一四年までであつた。この年以降一方迪化兩紙幣の増發を見、他方一九一九年まで新疆財政部が支那中央政府から約五〇萬テールに上る補助を得て行つた銀準備の減少するに隨つて、前記諸貨幣の單位比價は破られたのである。一九二四年には既に兩銀對迪化紙幣相場は二・八兩となり、正貨としての迪化兩紙幣は新疆の通貨市場から漸次姿を没し始めたが、其の後所謂「墨銀」なる偽替銀貨を仲介して行はれる新疆、東支那間の支拂勘定手段としての、また本地方の通貨としての迪化兩紙幣は、暴落の一途を辿つてゐる。名目銀兩に對する迪化兩紙幣の支拂能力の相場離れは、硬貨（銅貨）との兩替關係にも伸びて來た。之は新疆國庫が、自ら迪化兩紙幣に青銅貨三〇〇ダーチャンを支拂ひ、後に更に小額兌換を行つた以上當然とするのであつて、終には、銅貨は市場に姿を消して、住民は銅貨を道具、器物に改鑄するに至つた。

兩紙幣の増發は愈々盛となり、一九三二——一九三四年の回教徒軍の兵亂を見、加ふるに世界的經濟恐慌の襲來を受け、迪化紙幣は、遂に慘落の憂目に遇つた。之は所謂弗銀（フ）兩銀（ヤムプ）に對する迪化紙幣の平均相場比率表によつて明かである。

銀 兩 (ヤムブ)	通 化 兩 紙 幣 單 位					
	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年 月一日	一九三四年 月一日	一九三五年 月一日
墨 銀 弗	三・三〇	三・八〇	六・六〇	一〇・五〇	八〇・〇	七二〇・〇
銀 兩 (ヤムブ)	四・一五	四・五六	八・〇〇	一六・〇〇	五〇・〇	八〇〇・〇

註 墨銀弗は、一九三五年まで支那本土に流通した單位銀貨で、重量銀二三・九八瓦、含有銀八九・九〇、支那本土と新疆との勘定は、之によつて行はれる。

新疆各地方の通貨市場に於て、貨幣は中央迪化市場は勿論、各地相互に其の相場を異にする。之は自然、貨幣の取引投機を助長する。

南新疆の貨幣制度の基本を成すものは、サラ紙幣の名目本位貨たる重量三六・五二三瓦の喀什噶爾銀サラ（エルチャン）である。

喀什噶爾の紙幣サラ及銀サラ間の名目比率は、目下既に解消してゐる。そして喀什噶爾の銀サラは、最早や勘定貨幣では無く、迪化の銀兩同様、概して爲替用大洋及墨銀弗以上の交換相場を以て、新疆の全通貨市場に取引される商品となつてゐる。喀什噶爾の銀サラは、二の計算除法即ち一は、十進法で一サラが一〇ムイスカル（錢）に當り、他は舊回訖除法で、一サラが一六ヤンギに當る。

一サラ貨以外に、半サラ（五ムイスカル）ミ三ムイスカル及二ムイスカルの小貨が造幣されてゐる。サラの兩替用銅貨はチホヒであつて、一サラは四〇〇チホヒである。

然し實際に流通してゐるのは、二〇チホヒ、一〇チホヒ、五チホヒ及一チホヒだけである。チホヒ貨は、普通中央の孔に

絲を通して一束とする。このチホヒ貨は又條件的單位即ち一チホヒがニブルミとなつてゐる。但し和闐地方に於ては若干他の割り方になつて居り、即ち一サラは、一六ヤンギで無く、八ヤンギとなつてゐる。故に一ブルは一チホヒに相當する。紙幣サラは百分される。

公定相場比率にあつては、カシガル紙幣サラは、三ウルムチ紙幣兩に等しい。併し乍ら通貨市場は、恰度取引爲替相場に於ける需給に従つて、サラ、墨銀弗及印度ルビー間の兩替相場比率を建てるのと同様にして其の兩替打歩を定めてゐる。サラミ墨銀及ルビー比率の消長は、下表に見る如くである。

	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三四年 月一日	一九三五年 月一日
墨 銀 弗	〇・七五	〇・〇八	一・四	一・〇七	一	二二〇・〇
印度ルビー	〇・五六	〇・八〇	一・七	二・六三	五・〇〇	二五・〇

註 印度ルビーは、約一八・八分一ペンス。

二 銀行及金融機關

新疆には一九二七年まで舊露亞銀行の支店があつて、十月革命まで銀行券を發行し、それは國券と同じに流通してゐたが、同年にその營業を清算した。一九二八年以降、迪化政府は官營地方銀行を興したが、銀行は最初單に爲替業務のみに従事してゐた。一九三一年一月一日から着手した改組と共に、本銀行は預金を取扱ひ（年八%を以て）、國庫機能を行はし（銀行券の引換、關稅取立等）尙一二乃至一五%の利率を以て商人に對し貸附を行ひはじめた。本銀行は伊犁、喀什噶爾、塔城、承化及奇台に支社を有する。その公稱資本は墨銀弗五百萬であるが、實資力は極めて寡

く、それは營業規模に影響し、従つて政府の金融市場調整機關たる役割を遂行してゐない。支那及外國貨幣を以て資本を蓄積するため、銀行は其の營業機關として、一九三〇年八月新疆財政委員長が對支原料輸出の目的を以て創立した貿易會社ト。チャン公司(資本金一百萬ウルムチ兩)を利用しやうとした。銀行はこの會社との組織的關聯は、共通の本社と共通の監督機關を経て實現された。

新疆政府銀行の組織上の弱點は、國內に無数の高利貸兩替商を存続せしめる素地をなしてゐるが、兩替業の殊に發達してゐるのは喀什噶爾である。喀什噶爾の兩替業は、主として印度人、質屋、民間の金融機關の手中に在る。金融機關は主として新疆に於ける支那商會である。これ等商會は有價物件、商品及資産を抵當として貸付を行ひ、各種の債務を設定し、並に東部支那、印度の諸都市に爲替營業を行つてゐる。彼等の金融は全然高利貸利率(三〇—四〇%)を以て營まれてゐる。

三 歲計豫算

一九一〇年迄新疆の地方的収入の最大項目に屬したのは、北京からの毎年の填補金(銀)であつた。この年以後、國內資源に俟つ新疆歲計豫算の自治化が初まつた。收入豫算の作成之が處理は、現今に於ては迪化政府の獨立機能となつてゐる。一九二一年に於ける國庫收入總豫算は、八百〇八萬三千ウルムチ兩、支出豫算は、七百九十四萬ウルムチ兩、歲出入豫算は、總計約一千六百萬ウルムチ兩であつた。現在の新疆の歲計豫算額を示すことは、通貨發行額同様、其の報告數字が公表されないため到底不可能である。然し農家に對する課税額が増加して、二、三倍となり、また一般的に租税が自然的増收に向ひ、紙幣の發行が加速度的に膨張し、加之戰亂に會する等種々の關係から最近十ヶ年に於て新疆の歲計豫算には非常な變化を見て居る。換言すれば一九三〇年まで、即ち殊に支出豫算に於て豫算各目

に多大の増加を來たすに至つた。哈密の反亂事件前には、新疆の歲計豫算は四千一百萬ウルムチ兩で、うち收入の部二千四百ウルムチ兩、支出の部一千七百萬ウルムチ兩であつた。而してこの當時まで流通してゐた貨幣の總額は約二千八百萬ウルムチ兩であつた(カシガル貨幣を含む)。

收入の主要項目は、地租及農業收益税、輸出入關稅、紙幣發行及其兌換收入、商業取引税、官有地及官有財産(水田、森林、官營馬廠、鑛山採掘、政府出資の商工業等)收入、鹽其他の專賣事業、民間採金業課税收入、手工業及一般工業、商取引、家屋、不動産に對する課税、各種登記税である。國庫は、一九三一年の禁煙令廢止まで收入の大部分を阿片吸飲罰金より得て居つた。主要支出項目は、軍隊及行政機關の費用である。國民經濟の發達に對する支出に至つては僅少に止まつてゐる。之は斯る支出が、賦役(例へば、灌漑及道路工事等)の形態を以て、住民の肩に轉嫁させられてゐるからである。一九三五年以降、新疆政府は其財政狀態の強化を圖つて、紙幣の發行を調節し初めた。

第九章 貿易

一 新疆市場

新疆市場は省の若干地域に於ては、商品—貨幣的關係の相當發達せるを見るに拘らず、一般的には、閉鎖せる地方的形態を有する市場となつてゐる。抑々新疆は經濟的一全として結合せられてはゐない。即ち封建的生產方法のため宏大な地域に渉る各地の相互的分裂性の解消せざるため、更になほ今日まで内國關稅の存續してゐるため、各地方間の市場的結合は比較的甚だ薄弱である。國內的需要品物價なるものは、斯ういふ原因からして新疆の各内國市場に於てそれぞれ殆ど獨立的に發生する。新疆市場の他の特色としては、都市—農村物價の水準に著しい開きの存することであつて、それは實に一〇〇—二〇〇%乃至それ以上に達する。

貨幣關係は、新疆の都市地方に比較的發達してゐる。之に反して僻陬地の市場、殊に遊牧民の居住する草原地方にあつては、直接的物々交換取引が優越してゐるが、これは村落住民に對する商業的搾取に、特に有利な素地を與ふるものである。物々交換に際して貨幣單位の役割を務めるものは、羊、磚茶及其他の商品である。然し商業取引上純然たる貨幣勘定の行はれる地に於ても、農業生産者は、直接市場との賣買關係を有しない。農民—市場間には、商業的、高利貸的資本の介入せること既に久しく、この介入資本は、豫め「賓窮」の手段を設けて、生産品を獨り資本主にのみ引渡さしめ、其價格は彼等が勝手に附するも何等云々する餘地ならしむるやう、農民を拘束するものである。國內に安價の交通方法を缺くため、商品の輸送費は商品價格に重く轉嫁される。若し内國關稅（出產稅）及外國商

品の輸入關稅、並に他の凡有る課稅及諸掛り、更に場所によつて十割乃至數十割にも達する商人の利得を計算すれば新疆住民が市場から購買する商品の價格が如何に高價であるかが判る。また同一年間に在つても、時季に依つて同一地方の農產物價の激變することは新疆國內市場の特色である。

負擔限度を越えた諸稅課並に地方の富農、商人及高利貸に對する債務のため、新に彼等から或は金錢或は現物による貸附を受ける必要から地方農民は、收穫直後（又は屢々畑作のまゝ）其の生産物を彼等に賣却しなければならぬ。各種商品の取引獨占者となつてゐる新疆の個人商乃至商社は、多量の商品を集積して高利を追つて人爲的に物價を吊り上げるのである。

二 商務會と地方商業資本

商務會は、新疆の多數大商業都市（迪化、伊寧）に存在する。商務會に關する南京政府の法令に依れば、其任務は省の商工業に對する援助であるが、實際は商業取引の相互關係に基いて起る地方商人の各種の紛争を賠償請求を仲裁的に審判することに限られてゐる。商務會の若干のもの例へば伊寧の商務會は一九三三年までに、卸商—小商人千人餘を聯合した。

新疆市場に於ける支配的な商業資本、殊にその大なるものは東部支那の貿易商及一九一三年まで帝政露西亞臣民だつた商人（ウズベック人、韃靼人）である。

極めて不完全且つ今日としては既に古くなつた資料に依れば新疆商業資本の最も大きな代表者に屬する商會は、クリヂヤに於ては、ムサバーエフ、ババーシエフ、アルマズベコーフ、サトレトヂノフ兄弟、「アルタイ」會社、フアフルトヂノウイ、シャラルホヂャーエフ。

カシガルに於ては、アフンバエフ、アフメッド、ハヂエフ、ミラメトハン||ベイ(アフガン人)、ババクルバン。弛化地方に於ては、それ〴〵數百萬の商取引を有するチャヌイシウイ、ラマンバエウイ、インガムバエフ、ムヒトフ等。

チグチャグ地方に於ては、最巨商として獨占的地位を占めるチャヌイシフ、バルタバエフ等が嶄然優越してゐる。東部支那に取引を行ひ、新疆全地に廣く支店網を有する支那商會にはテイ・チャン・ハン(所有主ヤン・フエ・シャ)トシ・シエンホ、デ・シン・ヘー(天津商會)所有主ヤン・シャ・ジャン)ジュン・ヘイ・ヘン、ユー・シエン・テン、トウ・チャン公司等がある。純商業以外これ等の商會は廣く銀行營業をも行つてゐる。

多數の小、中商人は廣く獨立的に外國貿易取引を行ふこと無く、獨立的に又は大商人の代理商として、國內僻遠の地に入込み、買賣に従事し、基本的な商品流通網を張つて居る。

新疆には個々の失敗した商人資本を合同する傾向が著しい。これは或る場合には、取引商人の彼之の大商社をして國內全體或は國の各地方々々に於て、個々の商品の一手販賣を行はしむることになる。

一方新疆の商業資本は、極めて密接に政府筋に關係して居る。新疆の一部行政官は、何等かの取引商會の株主であり、或は直接に商會の持主になつて居る。

戰亂事變前數年に看取されたことであるが、政府出資参加による商人の新合同の結成及一部商會に個々の商品(毛皮、腸、波形織、絹布等)の專賣權を賦與したことは、商業資本と行政權の融合の深化、更には新疆の大商人社會の代表者連(獨占者等)の經濟力の強化を物語るものである。一九二九年新疆の生産品を東部支那に移出する目的を以て設立されたトンチャン公司は一九三二年には、政府の投資持株と共に獨占商たるチャン・シエフ家と支那商會ヂヤオの手に實際に移轉した。

新疆の現代商業資本にまつて特色的な他の一面は、資本が夥しく農業(牧畜及土地所有)に投ぜられてゐることである。多數の商人獨占者は、廣大な土地の所有者であり、大家畜群の所有者である。

而して工業界(ムサバエフの皮革製造所等)には、單に一部商會が比較的僅少の投資をしてゐるのみである。

三 外國資本

一九一八—一九二七年の期間に、新疆市場に旺に投ぜられた外國資本、殊に商業資本は、近年漸く其の活動を收縮して市場を去り初めた。

新疆に於ける外國資本は其最盛期に於ても、毛皮、腸、駱駝毛等の輸出商品のみを好んで取扱つた。外國商會は農業輸出生産品(生皮、生畜、粗毛等)の大部分には餘り手を染めなかつた。

この期間(一九一八—一九二七年)に於て、上記生産品の輸出及歐洲製小間物及手工業品の輸入に活躍してゐた外國商會中、主要のものを擧ぐれば、米商會ブレンネル兄弟(毛皮、腸)、英商會アーノード(毛皮、羊毛)、英商社カウフマン(棉花、羊毛、毛皮)及獨商會ファウスト(腸)である。

其後叙上の諸商會は、初め甘肅、次に哈密に起つた事變のため、其事業を或は清算し或は縮少し、最近に於ては、商業に手を出して居ない。

新疆南部に於ては、英、印及アフガンの商業高利資本は、單に純商事のみならず、高利貸業を營んでゐるが、これ等資本家の一部代表者は、數百萬の取引額を持つ大商會を經營してゐる。

四 關稅政策と關稅

吾人が新疆の關稅を云々するにしても、それは一九一七年以降のこゝである。其當時までは、純粹な外國貿易の行はれた露國—新疆國境に於ては、帝政露西亞が半植民地支那に強制した各種の隸從的條約を以て、露國の貿易は一切の課稅を免れてゐた。

十月革命後に至り、新疆は、初めて帝政露西亞の植民地的支配關係より脱して、關稅の課徵を行つた。東部支那に於ても、新疆に於ても、近年に至るまで、統一された關稅率といふものは無かつた。即ち國內各地に於て各異つた關稅率表があつた。稅關は、毎年個人商人に貸貸され、商人は事實上隨意に定率表を作つてゐた。

全支那共通の關稅定率の公布と共に内國關稅(統稅)の廢止が布告せられたが、事實上、その當時まで新疆には、二つの關稅——外關稅、内關稅が存在した。外關稅(海關)は、外國より新疆に輸入される商品の遠地發送の際に、また内關稅は第一着地の境外に商品の再輸される際に徵收されるのである。新疆境域より他に輸出される商品も、矢張り外、内の二重關稅を課せられる。一九三一年にこれまで獨立的に存在した内、外稅關の合同が行はれた。

新疆政府が採用した關稅定率は、一九二九年以降組織的に増加した。一九二九年五月までは新疆に輸入される商品は送狀價格に對し五%を課徵したが、一九二九—一九三四年の間に、この稅率は幾度か改正されて其度に引上げられてゐる。一九三四年改正の現行輸入關稅は、次掲定率表に見る如くである。(商品價格に對する百分率或は金單位。金單位ス—四〇米仙)

綿織物	一〇—一二%
亞麻織布	一二五%
綿絲(ゲロス)	〇・一七%
砂糖(ザラメ)	五〇%

六・三五—九・六〇金單位

砂糖—精製(一〇〇疋)	五〇%
菓子類	三五%
茶	三〇%
草靴及皮革製品	三〇%
オーバー・シューズ及護謨製品	四〇、五〇及八〇%
既成品衣類	四〇%
燐務用品	二〇%
織造器具	一%
農用機具	七・五%
二〇キロワット以下の電動機	一五%
其他	一〇%
自動車	一五%
ミシン機	一〇%
鐵製臺	三〇%
石油(一〇疋)	〇・四五金單位
鹽銃	四〇%
紙卷煙草用紙(一〇〇疋)	二五金單位
蠟(一〇〇疋)	一三金單位

新疆經濟要覽

硝子製品	二五%
陶器	五〇%
玩具及スポーツ用具	三五%
香水及髪油	三五%
家庭用石鹼 (二〇〇疋)	八・八〇金單位
セメント (二〇〇疋)	〇・八三金單位

外關稅は、商品の送狀價格標準に依る従前の如き關稅徵收法に變はつて、今日では、小賣値段に依つて徵收されてゐる。而して近年は市價が非常に騰貴する一方、本地方の貨幣價值が低落したため新關稅の算出法は、單に關稅施行時の一度の引上げでは無く、商品市價の騰貴に平行する不斷の増課率を示すものである。

新紙輸出商品に對する外關稅も、一九三〇年以降關稅率にしては七・五%に固定してゐるが、關稅價格の評價の増大に伴れて事實著しい引上げになつてゐる。

ソ聯邦より遠地に輸入される商品に對する内關稅は、該商品が一地方より他地方に搬出される度毎に徵收されるのである。ソ聯邦よりの輸入品に對する關稅は五%以上である。

内、外關稅以外に、輸入、輸出とも各當該地に於て〇・一〇帖の行政手数料を課せられる。なほ海關は各發送商品貨物に對して發行する證明書用印紙稅として一〇乃至二〇帖 (三乃至六兩) を徵收する。

五 新疆の外國貿易

新疆は、ソ聯、東部支那、印度及アフガニスタンに、幾分活潑な貿易を行つてゐる。而して西藏及蒙古民族共和國

の如き爾餘隣接諸國の通商關係は極めて微弱である。

六 對印度貿易

英、印關稅統計に依れば、新疆の對印貿易額は、次表の如くである。(單位千ルピー)

年次	對印度輸出	自印度輸入	總貿易高
一九三二年	二、一三五	六一七	二、七五二
一九三三年	三、八六〇	四三六	四、二九六
一九三四年	二、〇九二	七〇一	二、七九二

印度よりの輸入の重要品目は(單位千ルピー)

品名	一九二八年	一九三三年	一九三四年
絹織物及天鵝絨	二七二	一七八	二九四
印度及歐洲產綿布	二〇三	二七	四九
染料及漆	一三九	五二	一三五
茶	三八	一八	一三三
藥品	二一	一七	二二
調味品	二〇	二二	二二

新疆の重要對印貿易品は、生絹、馬、^ト蔗、貴金屬、^トチラス（「アナシ」の痲醉劑）、羊毛製品（フェルト、絨氈）である。斯の如く羊毛、生皮革、棉花等新疆の村落經濟の基本的生産品目は、輸出品名表に加はつてゐない。

同様に印度より新疆への輸入も、其の商品目に於て、極めて限られて居り、基本的品目としては綿布、絹布及染料といふところである。印度織物は商品輸送條件ミ、印度木綿をして競争不能たらしめる高運費ミによつて、新疆市場に深く根帯を卸ろすことは到底困難である。

七 支那本土との貿易

新疆ミ支那本土との取引關係を不完全乍ら舊資料數字（一九二九年當時の）に依つて示せば（單位ウルムチ兩）次の如くである。

東部支那向輸出	
毛皮	四、四〇〇
駱駝毛	一、六〇〇
棉花	八〇〇
藥品	二〇〇
羊毛皮	二〇〇
羊皮	六〇
馬毛	五〇
乾果	三〇
金銀	九八〇

東部支那よりの輸入

茶	五、〇〇〇
絹布及毛織品	五、〇〇〇
食品	二、〇〇〇
各種商品（葉卷煙草、醫藥、小間物等）	二、九〇〇

對支那本土貿易に關する資料は遺憾乍ら最近顯はれない。

新疆の東方輸出は主として、毛皮、駱駝毛及貴金屬に限られてゐる。

東部支那よりする新疆への大綜的輸入品目は先づ茶であつて、茶は新疆遊牧民の重要な必需品目であつて、これに次ぐものは、支那産の特殊必需品（生絲、支那の食料品）である。

一九二四—一九二六年に於ける支那本土及新疆間の商品取引は、前表に見るが如く、著大な數量に達してゐる。併し乍ら法外に價格を騰貴せしめる困難な商品輸送條件並に戰亂は、その取引額ミ品目數を今日迄著しく縮少せしめてゐる。

八 アフガニスタンとの貿易

新疆ミアフガニスタン間貿易は、交通困難のため、極めて僅少の意義を有するに過ぎない。アフガニスタンよりの輸入は、年に八〇萬乃至一四〇萬ルビーにして、アフガニスタンへの輸出は二〇萬乃至六〇萬ルビーである。

新疆よりアフガニスタンへ輸出されるものは、主として生絲であつて、小額品ミしては、薄フェルト、絨氈及其他の商品である。またアフガニスタンより新疆に輸入されるものは、阿片、馬、毛皮である。アフガン側の統計資料に依

れば、新疆よりアフガニスタンへの輸出は一九三三—三四年に於て六二萬五千アフガニー、新疆への輸入は四二萬アフガニーであつた。新疆の對アフガニスタン總貿易比重は、同年一ケ年間に於けるアフガニスタンの全外國貿易取引額の〇・三%に當つた。

九 ソ聯邦との貿易

新疆の經濟生活關係に於て、全然異なる構成を意義を有するものは、對ソ聯邦貿易である。ソ・新貿易は一九二三—一九二四年から發達し初めた。本貿易はソ聯邦の新疆に對する經濟的引力、大戰後に於けるソ聯經濟力の迅速な復興及之に照應したソ聯邦對外貿易政策に依つて急テンポを以て飛躍した。

ソ・新貿易は、新疆の文化的・經濟的後落性其自然的地理的孤立を利用することを原則とする資本主義諸國のそれは異り、相互利益の尊重を出發點とした。このことは對新疆貿易の殆き全面に亘つて、ソ聯邦が借方になつて居り、年によつてそれが四百萬留餘に達したことに徴しても明かである。

對新疆貿易に於けるソヴェートの價格政策はこの双方の經濟的發達を顧みる原則の上に立つてゐる。

世界的經濟恐慌、その結果たる原料價格の低落當時に於ても新疆に活動してゐたソヴェート商業機關は、其營業を縮小せず、また新疆の原料價格を引下げなかつたばかりでなく、部分的には原料價の引上さへ斷行して、新疆農民をば世界的經濟恐慌の打撃から防禦した。

ソ・新貿易の大凡の規模は、次のソ聯邦關稅統計數字にうかがはれる。

	一九一三年(I)		一九三二年		一九三三年		一九三四年		一九三五年	
	應	千留	應	千留	應	千留	應	千留	應	千留
ソ聯邦より輸出	九,九二八	八,四七七	八,〇〇六	一五,六六八 (二,六一〇)(II)	七,四三三	一〇,八八六 (二,四九〇)(II)	一八,八九四	四,七〇〇	二六,一二三	六,〇〇九
ソ聯邦に輸入	三,六三三	九,八四六	二四,八八八	二二,〇〇五 (四,五〇〇)(II)	三三,八九九	一八,八三三 (二,九八〇)(II)	三三,五五〇	五,九四三	二六,六六三	四,五〇〇

(I) 本表及以下に掲ぐる新疆關係の表に於て、一九一三年の數字は、帝政時に屬し、戰前版圖に於けるものである。

(II) 新疆貿易に關するソヴェート關稅統計の數字は、一九三四年前はチルゾオネツ留を以て計算し、一九三四年及一九三五年の數字は金留に引直されてゐる。

比較のため、本表に於ては一九三二—一九三三年の數字は、括弧内に金留を以て示した。

一九三二—一九三四年當時の新疆内部に於ける戰亂は、新疆の全國民經濟狀態に破壊的影響を及ぼしたが、それはソ・新貿易關係にも現れて幾分の減退を示した。

第十章 輸出商品

新疆からソ聯邦に輸出される主要品目は畜産品で、實に對ソ輸出額の七〇—八〇%に當つてゐる。

一 獸 毛

新疆の對ソ輸出の大総は獸毛である。柔織物用の最良質の羊毛は、和闐地方から搬出される。ソ聯邦に對する獸毛の輸出は次の如くである。

品名	應		單		位	
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
四、八〇〇	五、五六六	四、五七一	四、六四三	四、六〇七	四、七九六	

今日まで新疆の輸出品としての駱駝毛や山羊毛は、大體に於てソ聯邦仕向で無く、第三國への仕向けであつた。只最近に至つてソヴエト諸貿易機關も、これ等獸毛品の輸入に着手してゐる。

二 生 皮 革

ソヴエト關稅統計に依れば、新疆の對ソ輸出の皮革數量は次表の如くである。

品名	應		單		位	
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
未製皮革	—	四四	七四五	二五四		
精製皮革	二、七二二	—	—	—	二、三三〇	二、〇一七
山羊皮	—	一、七四二	一、三二七	一、二九四		

最良の絨毛羊皮は「東方」に輸出される。

三 棉 花

ソ聯に對する棉花輸出は、戰前額に比して非常に減退して居つて、現在は戰前額の約五分の一に過ぎない。棉花のソ聯邦輸出は、次の如くである。

品名	應		單		位	
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
五、三〇〇	一、一八四	八九九	一、二一八	一、二六四	一、〇九四	

棉花輸出の減退は新疆に於ける棉花栽培の不振に起因する。加之殊に近年新疆軍需の注文増大及隣接國（アフガニスタン及印度）へのマータ（綿織の一種）の輸出激増に關聯して、地方手工業用棉に對する需要が目立つて増加してゐる。

四 生 畜

新疆からソ聯邦に輸出される生畜總數は、三〇萬頭を突破してゐる。因にその内譯は平均半一萬九千頭、馬は約八千頭、その他は羊類である。

ソ聯邦に對する家畜の輸出は、ソヴェート關稅統計に依れば次記の如くである。

名 稱	總 數		單 位	
	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年
牛	五、五四八	四、二五六	八、四四六	一六、二〇一
羊、山羊	八、三九六	八、三七八	一七、七一	一七、三六一
馬	一、三五五	一、五一七	二、〇五九	

五 蠶 絹

生絹は、只東トルキスタンから輸出される。新疆養蠶業の年生産總額は、一〇〇萬に達し、その大部分(六〇%)は印度に輸出される。

新疆の絹は、世界的經濟不況の當時に於ても、本地方貨幣が、印度ルピーに比して低落甚だしかつたため、ずつち印度に輸出されてゐた。ソ聯邦への絹產品の輸出は次記のソヴェート關稅統計數字の通りである。

品 名	總 數		單 位	
	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
生 絹	五二	四	三四	六一

繭(一時極めて小額の輸出のあつた)と生絹のほか、ソ聯邦へは所謂絹屑——サルナックミバシウチが多量に輸出される。

六 絨氈及フェルト

絨氈の製造は、カシガル諸地方一體に普遍してゐる。カシガル産絨氈は、可成り低く評價されてゐるが、古くから印度、東部支那並にソ聯邦に對する新疆の一つの輸出品となつてゐる。

ソ聯邦への右の輸出は、一九三二年に四萬、一九三三年に一四萬であつた。一九三四年には、絨氈のソ聯邦への輸入は無かつた。薄フェルト(コシマ)は、ソ聯邦には輸出されてゐない。

七 毛皮及生毛皮

毛皮買入れの主要地方は、アルタイ地方及クリヂヤ地方である。

毛皮は、東部支那に對する新疆の基本的輸出品目である。毛皮の取引は、最近迄、外國人支那商會に集中されてゐた。例へば一九三三——一九三四年の叛亂事變迄は、クリヂヤ地方に於ては、ムールザムハメウイ兄弟(マウシシンドイ商會ミヂイシンドイ商會)は、該地方の毛皮の總買付高の六〇%、ユーハイシシ商會は同じくそ

の二五%を買占めてゐた。アルタイ其他の地方に於ける毛皮市場の同様の獨占者として進出してゐたのは夫々の支那商會及外國商會（ブレンネル兄弟其他）であつた。

一九三二年ソ聯が、新疆に於て買入れた毛皮總計百三十五萬四千留、同じく生毛皮總計五十二萬六千留であつた。一九三三年には、毛皮四十五萬二千五百留、生毛皮三十九萬留、一九三四年には、これ等兩者の買付百十四萬八千金留（取引數字に依る）であつた。

第十一章 輸入商品

一 纖維工業品

纖維工業品類中、ソ聯邦から新疆に輸入されるものは綿織物、亞麻、大麻、黃麻製品及絲で、その輸入狀勢は下示の如くである。

製織品	單位					
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
綿織物	二、五四〇	一、八〇三	二、三五八	一、四三四	二、四九三	二、四七五
亞麻、大麻製品	—	五八	九四	二八	五七	三四

ソ聯邦から新疆に輸入される綿織物（百分率）の内譯は次の如くである。

更紗	二三・〇
中亞織捺染布	二・〇
下着地	四・五
裏地	二・五
襪子	一一・〇
一般衣服地	五・〇

第十一章 輸入商品

新疆經濟要覽

婦人服地 一二〇〇
 斑織 四・五
 アジア織 九〇〇
 粗中亞綿織物 一五〇〇
 綿織 一〇〇〇
 絨織 〇・五

綿布輸入額の著大なるに拘らず、新疆農民の大部分は、今日まで地方手工業製品（マータ其他）を纏つてゐる。新疆市場は、空地、オレンジ色、薔薇色、鮮紅色、黄色等特殊の色合を有するアジア風模様の綿布に需要がある。

二 砂 糖

新疆市場の砂糖の受容力は、二、五〇〇—三、二〇〇吨で、ソ聯よりする砂糖の輸入は、關稅統計の數字に依れば次の如くである。

年	噸		單		位	
	一九一三年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年
一九一三年	一六四	三、二二二	一、六四一	一、七六六	一、九六五	二、九三七
一九三五年						二、五〇一

三 石 油

ソ聯から新疆に輸入される石油は、戰前額に比し數倍に上つてゐる。新疆の石油受容力は、石油需要の増加に加ふるに自動車輸送の發達に伴ふベンジン需要の増加によつて増大した。

併し乍ら住民の大部分、都市住民までも、原始的照明（油脂等）を用ひて居る。ソ聯からの石油の輸入は、次の如くである。

年	噸		單		位	
	一九一三年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年
一九一三年	三九〇	九三〇	五六三	七四二	七九二	一、六七七
一九三五年						三、二〇四

四 金屬及金屬製品

これ等商品の新疆輸入は、纖維に亞ぐ地位を占めてゐる。輸入額は、次の通りである。

未加工金屬品	噸		單		位	
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
金	九八〇	八九七	七〇五	八九四	五九九	六七〇
屬品	—	一三	三八	—	—	—

未加工金屬に對する新疆市場の需要は、ソ聯の輸入を以ては、未だ充足されてゐない。殊に鐵條、屋根用鐵板、帶鐵に不足してゐる。同様にまた金屬製品（釘、熊手、斧、圓七等）についても市場は、常に輸入を超過する需要を持つてゐる。

ソ聯から輸入される未加工金屬は、次の如きものである。即ち鐵條——六〇%、屋根用黑葉鐵板——二〇%、亞鉛引鐵板——一〇%、板鐵——八%。其他の金屬品としては、鉄鐵、錫板等があつて、輸入金屬の二—三%を占めて

五 農用機械

ソ聯からの農具輸入の計畫的事業は、一九二九年から初まり、その輸入額は、一九三一年に一一萬二千留、一九三二年に一二萬五千留、一九三三年は一五萬一千留、一九三四年は二萬七千留(金)であつた。

耕作農具中新疆市場に於て、最大の需要を有するものは、六乃至七吋單頭犁、鋸齒型「耙」、根切器、一七半型ローラー機、條播機、盤狀播種機、採草機、刈入機、簡易收穫機、馬力打穀機、豆、玉蜀黍簸機、選穀機、玉蜀黍磨碎機等である。

ソ聯から輸入される機械及器具類は、次表の通りである。

機 具	噸		單		位	
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
	六二六	一、〇〇七	九七四	六六六	四三四	一、三三四

輸入機具中主要な位置を占めるものは黑色金屬製品即ち容器(鑄物、エナメル塗り、亞鉛引き)、釘、電線、シオベ、熊手、寝臺等にして、金屬品總輸入額の九二%を占めてゐる。餘り八%は有色金屬製品である。

六 燐 寸

ソ聯邦よりする燐寸の輸入は、帝政露西亞時代の戰前輸入を遙に凌駕してゐる。

ソ聯からの燐寸輸入は、次表の如くである。

一九一三年	噸		單		位	
	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	
一六四	一四六	二三八	三六八	二五九	一四六	

七 硅 酸 製 品

ソ聯から輸入されたる主要硅酸製品は、總輸入陶器の六〇—七〇%を占める小椀、大椀及茶飲茶椀である。硝子器類(窓硝子及ランプ)は、總輸入硅酸製品價格の二〇%に相當する。新疆輸入市場の窓硝子の受容力は、四—五千函に達してゐる。磁器類は總硅酸製品價格の約五%に當つてゐる。

ソ聯よりする陶磁器及硝子製品の總輸入額は次表に示す如くである。

一九一三年	噸		單		位	
	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	
八二	三〇八	二九四	一六〇	一五六	二四二	

或る年次には小額ながら、ソ聯からセメントが輸出されることがある。

八 其 他 商 品

新疆が輸入する他の諸商品中、總輸入額の一〇%に達するものとして、煙草、菓子、護謨製品、酒類、食料品、文具等、を挙げなければならぬ。

これ等の商品の輸入は、ソヴエート關稅統計に依れば、次表の如き數字に上る。

品名	單位					
	一九一三年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
護謨製品	九	四六	三六	五三	二七	一五
工業品	九五	一〇	一九	一三	一八	八七
化學品及藥品	一	一三	一九	一三	三七	一
曹達	一	一〇	一三	一二	一	一
放香物	一四	五〇	七四	三六	五二	三七
ベニヤ板	一	三四	二〇	一八	三五	二二
繻詰	一	二一	一	三	一	一七
煙草	四二	四〇	四〇	二七	九三	一三六
菓子	一	一	一	一	一	一

第十二章 度量衡

新疆に於ては、商業取引に測量に支那の度量衡と現地の度量衡とが併用されてゐる。主要商業地點、殊に國境線に在つては、露國の舊度量衡法と米突度量衡法とが行はれてゐる。

支那の度量衡法は、重量と長さ並に貨幣まで、同一名稱の計量單位を以て決定されるといふ點で、概して便利である。

一 重量々目

支那式計量の根本となつてゐるのは「チン(斤)」であつて、之を新疆に於ては「チン」と發音してゐる。一斤は量目一六ラン(兩)であつて、公定的には五八六瓦即ち一・四四露斤になる。然し實際的には、一斤の重量は、斤の組成分たるランの重量の如何によりて極めて不同である。新疆に於ける重量ランには、都合三種あつて、専ら貨幣價值評價(金銀)に用ひられ、重量三七・一八瓦を有する「クレーピンラン(庫平兩)」、また重量三五・七八瓦を有し、商取引に用ひられる「シャンピンラン(商平兩)」、及南方新疆に行はれ、三六・五瓦を有する「カシガルラン」之である。

「シャンピンラン」と「カシガルラン」とは、重量單位たると同時に新疆貨幣制度の基本となつてゐる銀貨の重量計量單位である。(通貨の項参照)。

右三種のランの量目割りは同じであるが、其基本に在るランに隨つて、量目割りの重量も決まるのである。量目割りは、即ち一ランは一〇ヂャン(吊)又は一〇ムイヌカール、一ヂャンは一〇分、一分は一〇厘、一〇〇ヂャンは

一ピクルに等しい。

小固形物を秤量する衡器は、銅の象眼を以て斤の量目割りを表示する露國の垂秤に似てゐる。この衡は檢印を押捺せず、査定も行はれない。小賣商業にあつては、買入用、賣渡用、普通用の異種衡器があつて、各五ヂャン乃至四分の一斤の差異を有する。故に通例商取引に於ては、取引締結時に、何斤を重量單位とするかを豫め協定する。

二 長さ量目

長さの計量の基礎となるものは、『分』——米粒の長さ——であつて、之は一〇厘に分かたれる。『リ』は長さの計量の最小單位で同時に最大單位である。尺度は、一厘は〇・三五耗。一〇厘は一分、即ち三・五八耗。一〇分は一寸即ち三・五八耗。一〇寸は一尺、即ち三五・八耗。一〇尺は一丈、即ち三・五八米。一八〇丈は一里、即ち六四四・四米である。

これ等支那尺度を並んで、織布の賣買には、露國のアルシンが用ひられ、最近年に於てはメートルが行はれる。
譯註 露國上に厘と里を同視したものとされる。

三 穀類量目

穀類の基本量目は『石』又は『ダグダン』——袋であつて、其重量は、新疆の各地で、非常に相異してゐる。隨つて國の全地に涉つてダグダンの確定した重量といふものは無い。例へばクリヂヤに於ては石の重量は、一二二・九耗、ウルムチに於ては二三五・八耗である。石の公定的區分單位は、一石は、一斗(即ち一〇アガチ)。一斗は一〇升。一升は一〇合。一合は一〇勺。一勺は一〇撮等。

穀類量目の最小單位は、『テエ』黍一粒に均しい。大重量のものにあつては、支那の計量『解』(ホー又はフー)

が用ひられるが、それは約六・五耗に均しい。

四 面積量目

一平方弓は二五平方尺。一畝は二四〇平方弓即ち二八・三・五平方米。一頃は一〇〇畝即ち二八三五二平方米。一歩(ホ又はフ)は約半ヘクターである。

五 地方的度量衡

支那及露國の舊度量衡(フント、アルシン等)並に米突法と共に、新疆には、今日まで、地方的度量衡が行はれてゐる。地方的度量衡の基本となつてゐるのは、『チャレク』であつて、それは重量單位の決定にも、地所の面積決定にも用ひられる。重量チャレクの量目割は、一バトマンは六〇チャレク、一チャレクは一五・五斤即ち九・〇八耗である。然し斤單位にしたチャレクの重量は、新疆の各地で非常に相異してゐる。即ちヤンギサル、カルガルク、ホータン、ダム、ケリヤに在つてはチャレクは一二・五斤に均しい。カシガル、マラルバシ、アクス、バイ、クチャール、クルリヤ、カラシヤル、トルファンに於ては、棉花と羊毛の計量では、一チャレクは一六斤、金屬の計量では一二・五斤である。カシガルに在つては、チャレクはダン(擔)に代用されて、恰度一〇斤になるのである。地所計量の場合には一チャレクは四分一ヘクター即ち約半歩に當る。

その他の地方に於ては、チャレクは、地租の課徴に照應する土壤の上下に隨つて、ガズを單位にしたチャレクになる。即ち一チャレクは、八五〇平方、七五〇平方、九〇〇平方ガズに當る。尺度にした一ガズは七一耗である。チャレク面積單位の他に『タナブ』平方單位が用ひられてゐるが、タナブの一邊は約六〇足歩に當つてゐる。

附、引用文献

露文圖書

カ・リリ、テ、ル著	東(支那)トルキスタンの土地所有關係	聖彼得堡 1899
クロバトキン著	カツガルの地歴的概観	聖彼得堡 1879
スウ、ン、ヘ、ゼ、ン著	亞細亞の心臓。バミール、西藏、東トルキスタン	聖彼得堡 1890 (二卷)
ベ、ス、ツ、キ、フ著	を隊長とする1889—1890年の西藏探検隊報告	聖彼得堡發行 第一卷1895 第二卷 1892, 第三卷 1896
ウ、イ、ロ、フ、ス、キ、ー著	を隊長とする戈壁探検隊報告	聖彼得堡發行 1899—1900 二卷
デ、フ、エ、ド、フ著	伊犁地方の軍事統計的叙述稿	タウケンツト發行 1903
エ、ス、ウ、エ、ボ、ゴ、ヤ、ウ著	長城外西部支那	聖彼得堡發行 1906
デ、フ、エ、ド、フ著	デュムンガルセミシチンスキー國境地方	第一卷、第二卷 タウケンツト 1910
ラ、ス、ト、チ、キ、ン著	東トルキスタン	タウケンツト 1911
ア、ス、ク、リ、ン著	支那トルキスタン	莫斯科 1930
ア、ウ、エ、オ、アル、チ、エ、フ著	國境デュムンガリヤ	トムスク 1914

露西亞語諸記論文獻

ガ、ゲ、リ、ス、ト、ロ、ム、氏	カツガル領事館通譯生ガゲリスロムのワラルバツ市出張往復時(1912年8月1日乃至17日)の旅行觀察記 雜誌 "イイズウ、スナイヤ、ミド、"、	第五卷 1912,
リュバ、バ、及、ク、ズ、ミ、ン著	西部蒙古コプロト及アルタイ地方	第二卷 1912,
ル、ー、チ、ン著	タルバガタイ "イイズウ、スナイヤ、ミド、"、	第一卷 1913,
メリ、ク、ー、モ、フ著	支那アルタイ概記 "ソ聯邦の東方貿易," 誌	第五——八號 1930,
エ、ス、ザ、ン、チ、ウ、ク著	新疆の畜産業 "ソ聯邦の東方貿易," 誌	第一——二號 1929,
エ、ス、ザ、ン、チ、ウ、ク著	新疆の經濟狀態 "新東方," 誌	第二六——二七號 1929,
モ、ニ、ー、チ著	西部支那國境の英帝國主義 "革命の東方," 誌	第一——二號 1930,
イ、バ、リ、ユ、カ、イ、チ、ス著	新疆市場に對する世界經濟恐慌の影響 "ソ聯邦の東方貿易," 誌	第一——二號 1931,
ベ、イ、フ、エ、セ、ン、コ著	新疆農村に於ける農民の階級化と窮乏化 "革命の東方," 誌	第三——四號 1932,
イ、バ、リ、ユ、カ、イ、チ、ス著	新疆に對する外國輸入貿易 "輸入市場としての東方諸國," 資料	莫斯科 1933,
イ、バ、リ、ユ、カ、イ、チ、ス、及、エ、ス、チ、フ、キ、ミ、ー、チ著	新疆の畜産經濟 "東方諸國の輸出資源," 資料	莫斯科 1933,
イ、バ、リ、ユ、カ、イ、チ、ス著	新疆の稅關組織 "東方諸國の關稅政策," 資料	1933,
ム、ラ、ウ、イ、ヨ、ー、フ、及、び、バ、リ、ユ、カ、イ、チ、ス著	クーリ、ウ、ヂ、ヤ地方の手工業 "東方市場," 資料	1933,

附、引用文献

- エ・ヂュコフスキー著 對新疆ノ聯貿易の緊急問題『全聯邦商業會議所
月報』 第二號 1932,
イクラチサツチ著 新疆の幣制破綻『全聯邦商業會議所月報』 第八——九號 1932,
ミルガダール著 西藏及西部支那に於ける英帝國主義の進出 『東方の黎明』誌 第一——四號 タックネット 1933,

外國語書及外國語論攻

- Hartman M. "Chinesisch-Turkestan", Geschichte, Verwaltung, Geistesleben und Wirtschaft. Halle 1906.
Deasy. In Tibet and Chinese Turkestan, London 1901.
Garruthers E. Unknown Mongolia. A Record of Travel and exploration in N. W. Mongolia and Dzungaria. Vo. 1. 2. London 1913.
Sykes Ella and Sykes Percy. Through Dererts and oases of Central Asia, London 1920.
Stein Aurel. Memoir on maps of Chinese Turkestan and Kansu-Trigonometrical Survey Officer. Delra-Dun (india). 1923.
Ehberten P. T. In the Heart of Asia. London 1925.
Karamishoff W. Mongolia and Western China, Social and Economic Study, Tientsin 1925.
Roosevelt T. and Roosevelt K. East of the Sun and West of the Moon, London.
Skrine C. P. Chinese Central Asia. 1926.

- Margen W, I. Across Asias Snows and Deserts, New York London 1927.
Cable Mildred and Franch Francesca. Through Jade Gate and Central Asia. 1928.
Capra Cluseppe. Sulle Orme di Marco Polo. Turin 1928. 548p.
Lø Cog. Albert. Von Land und Leuten in Ostturkestan 1928.
Visser Ph. Zwischen Kara-Korum und Hindukush, Leipzig 1928.
Fjohner W. "Om mani padme hum" Meine China und Tibet Expedition 1928-1928. Leipzig 1929.
Hedin S. Auf grosser Fahrt, Meine Expedition mit Schweden, Deutschen und Chinesen durch die Wüste Gobi 1927-1928. Leipzig 1929.
Hedin Swen. Across the Gobi Desert. London 1931.
Lattimore Owen. The Desert Road to Turkestan, Boston 1929.
Stein Aurel. Innermost Asia. Four vols, Oxford 1929.
Bossard Walter. Durch Tibet und Turkestan, Stuttgart 1930.
Boerich N. Heart of Asia. New York 1930.
Trinkler E. Im Land der Stürme. Mit Yak und Kamel-Karavannen durch Innerasien Leipzig 1930.
Macartney, Lady. An English Lady in Chinese Turkestan London 1931.
Filippe de Filippi. The Italian Expedition to the Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan (1913-1914) London 1932.
Stein, Aurel. On Ancient Central Asian Tracks. London 1933.

Schomberg C. I. Peaks and Plains of Central Asia, London 1933.
China Year Book. Tientsin 1934.

Feldman M. M. On the Economics of Sinkiang Province. The Chinese Economic Journal. v IV, N. 1.
and 2, 1929.

Feldman M. M. More of Sinkiang. The Chinese Economic Journal v. XVI, N. s. 1935.

新疆

縮尺

100 50 0 100 200

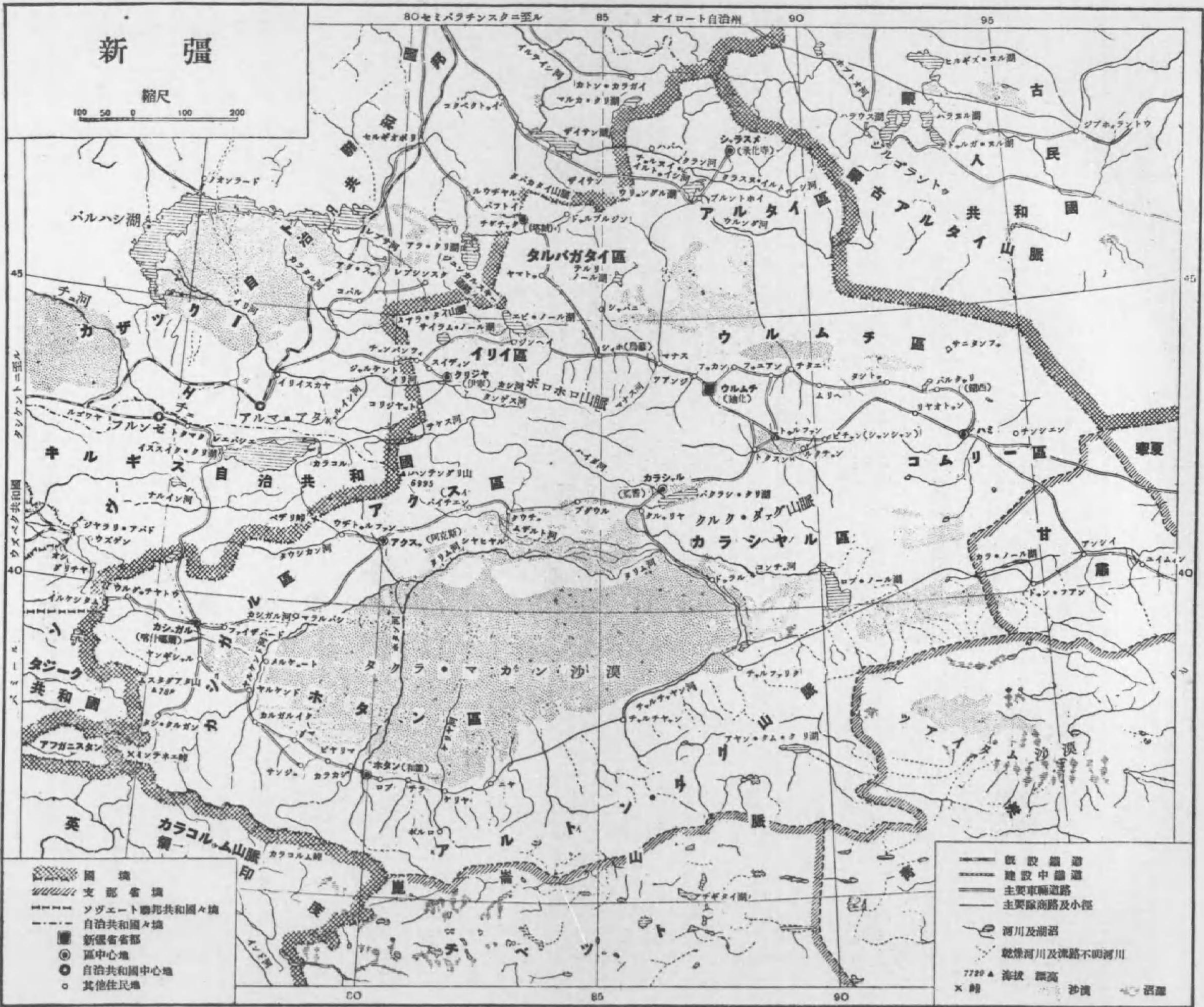
80セミパラチンスク=至ル

85

オイロート自治州

90

95



- 国境
- 支那省境
- ソヴェート聯邦共和國境
- 自治共和國境
- 新疆省都
- 區中心地
- 自治共和國中心地
- 其他住民地

- 既設鐵道
- 建設中鐵道
- 主要車輛道路
- 主要商路及小徑
- 河川及湖沼
- 乾燥河川及凍路不明河川
- 7780 A 海拔 標高
- X 湖 沙漠 沼澤

露文 翻譯文
ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

第一編	ソ聯極東地方要覽	同	菊判	二六二頁
第二編	ソ聯極東の運輸交通問題	同	同	二三八頁
第三編	モスコウ—イルクツク航空路の氣象	同	同	一八一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤(上卷)	同	同	三四一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤(下卷)	同	同	二四七頁
第五編	シベリア經濟地理(上卷)	同	同	二六五頁
第五編	シベリア經濟地理(下卷)	同	同	二九六頁
第六編	蘇城・オリガ聯合企業	同	同	三二二頁
第七編	ソ聯極東地方の自然地理及礦物資源に關する新資料	同	同	三一頁
第八編	東部シベリアの自然地理及礦物資源に關する新資料	同	同	二一八頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料(上卷)	同	同	二〇七頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料(下卷)	同	同	二八二頁
第十編	ビロビヂャン(猶太人自治州)要覽	同	同	一一〇頁

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

第十一編	ブリヤート蒙古自治共和国現勢	菊判	三〇三頁
第十二編	外蒙調査資料 第一輯	同	二〇二頁
第十三編	外蒙調査資料 第二輯	同	一八四頁
第十四編	ソ聯極東地方人種誌	同	二五〇頁
第十五編	永久凍土層の研究	同	一一一頁
第十六編	東部シベリア地方經濟要覽	同	三五三頁
第十七編	外蒙古の食肉資源	同	九九頁
第十八編	東部シベリア地方の有色金屬鑛床	同	一五一頁
第十八編	外蒙古地誌(上卷)	同	二六四頁
第十八編	外蒙古地誌(下卷)	同	一七二頁
第十九編	新疆よりゴビ沙漠を横ぎる	同	一一四頁
第二十編	シベリアの炭田	同	二五八頁
第二十一編	北地航空路の研究(上卷)	同	二二九頁
第二十一編	北地航空路の研究(下卷)	同	二六四頁
第二十二編	ソ聯極東の森林	同	四二二頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(上卷)	同	三四一頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(下卷)	同	二六〇頁

第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第一輯	菊判	一四六頁
第二十四編	ウダ・セレムジヤ四河河孟調査資料 第二輯	同	二〇六頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第三輯	同	一四八頁
第二十四編	ウダ・セレムジヤ四河河孟調査資料 第四輯	同	一四〇頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第五輯	同	一二八頁
第二十五編	アムール・ヤクーツクの氷上滲出水	同	二五〇頁
第二十五編附録	一九二七—二八年冬季に於けるアムール・ヤクーツク幹線鐵路の氷上滲出水圖面集	同	四六倍判 三六頁
第二十六編	全蘇聯鐵道輸送統計	菊判	一六七頁
第二十七編	ソ聯極東の水産及畜産	同	二六七頁
第二十八編	カザクスタン諸州概観	同	一一九頁
第二十九編	南ヤク・テイヤ氣候・地形・土壤・植物誌	同	二四六頁
第三十編	全ソ聯鐵道貨物移動統計	同	二二二頁
第三十一編	東部シベリア地方自然地理概観	同	二七〇頁
第三十二編	ソ聯極東地域に於ける新建築材料	同	一一六頁

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既刊目錄

第三十三編	ソ聯極東の産金地 (上卷)	菊判	二八七頁
第三十三編	ソ聯極東の産金地 (下卷)	同	三三二頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第一輯	同	三三六頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第二輯	同	二八八頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第三輯	同	一三五頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第四輯	同	一〇〇頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第五輯	同	三三四頁
第三十五編	東部シベリアの人口問題	同	一一〇頁
第三十六編	カムチャツカ州要覽	同	一四一頁
第三十七編	蘇領北地事情	同	一四三頁
第三十八編	ヤクト自治共和国現勢	同	一五二頁
第三十九編	ヤクトに於ける氣象觀測資料	同	四六倍判一三二頁
第四十編	西部シベリア地方要覽	菊判	三二六頁
第四十一編	西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観 (上卷)	同	三五八頁
第四十一編	西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観 (下卷)	近刊	
第四十二編	新疆經濟要覽	菊判	九二頁

四

昭和十二年十二月十日印刷
昭和十二年十二月十五日發行

譯文ソ聯極東及外蒙調査資料 第四十二編

新疆經濟要覽

大連市鳴鶴街一三二番地	著者人	古山勝夫
大連市桃源街八六番地	發行人	山岸守永
大連市近江町九一番地	印刷人	山田浩通
大連市近江町九一番地	印刷所	東亞印刷株式會社
大連市東公園町三〇番地	發行所	南滿洲鐵道株式會社

終

